

地獄の義兄弟(仮)

マクレイド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

モンド・グロツソのあの日、一夏は姉である織斑千冬に捨てられた、兄とも比べられ、卑下された、自分が死ぬのを待つ一夏に緑色のライダーが言う「俺の弟になれ」と、ひねくれたオリ主に着いてくことを決心した一夏は原作をどう引っ掻き回してくれるのか

追記

作品タイトルがまだ決定していません、こんなのがいいという要望があれば、活動報告をやっていますのでそちらにお願いします

#5 / 14

各話サブタイトル改名

目次

設定

地獄兄弟 設定 | 1

序章

真つ暗闇の無限地獄で | 4

行き着く先は | 11

1章

地獄のような | 20

with in the dark

30

明日を見るのは | 41

廻る世界 | 49

光るなら | 58

Love & Peace | 65

戦わなければ、生き残れない | 78

その目の闇は | 86

About Me | 93

兄として | 101

浄化の黒 | 111

設定

地獄兄弟 設定

矢車 蒼真（やぐるま そうま）

本作の主人公、学校でイジメにあい人に心を閉ざし引きこもっていたが、ある日親から勘当され家族も失い町を一人さまよっていたところを束に保護される、保護した束いわく、「自分に似ている」とのこと

戦闘時に着るのはISスーツではなく、仮面ライダーカブト本編で着ていたポロポロの服、本人いわく「この服は俺を表しているようで心地がいい」らしい

使うISはキックホッパー、カブト本編と同じ機能を発揮できるが、この世界にタキオン粒子はないため、クロックアップの時間がかかり限られ、少なくとも一日に一度が限界らしい

蹴り技を好み、拳を使うことは絶対がない、引きこもり時代から適度な筋トレはやっていたが、束に鍛えられたおかげで、今ではISを生身で破壊できる

一夏のことを、「相棒」と呼ぶ

見た目は矢車想を若くした感じ（伝わってるかなあ？）

(蒼真は矢車想ほどやさぐれてはいないが、自己嫌悪は一級品、キレさせるとあの束でも止めることが出来ない)

影山 一夏(かげやま いちか)

蒼真に救出された後、蒼真に着いてくことを決心した

昔から家事をやっていた(やらされていた)おかげでかなり生活力は高い

こちらでも戦闘時に着るのはISスーツではなく、カブト本編で着ていたポロポロの服、本人いわく「動きやすいからいい」らしい

使うISはパンチホッパー、こちらもキックホッパーと同じため説明は省く

蒼真とは対照的に殴り技を好みこちらも束に鍛えられたおかげで、ISを破壊できる蒼真のことを「兄貴」と呼ぶ

キレたら相手の肉体を滅ぼす蒼真とは違い、一夏は相手を内部から、つまり精神を崩させるくらい毒舌

見た目は本編の一夏がやさぐれた感じ、髪はいつも乱れている

二人のISは見た目こそ仮面ライダーキックホッパー&パンチホッパーだが、ISのコアがついていることにより飛べる、だが本人たちいわく「敵が空中に行ったら追うよ

り叩き落とす方がいいだろ？」らしい

二人の性格

蒼真は基本やさぐれていて近づきにくく勇気を出して近づいた女子は皆蒼真の「獣も殺せそうな眼」によって泡を吹いて轟沈している周りの女子いわく「目で落とす系の男子」らしい、根は優しく真面目で面倒見も良いが、一度自己嫌悪モードに入ると誰も止められない

一夏は外側は気優しく、爽やかな印象だが、一度敵と見なした奴には容赦しない、蒼真が止めろと言ったら直ぐに止める、蒼真と束に対しては本当の家族と思っており、愛している、その為家族をバカにされるとメツチャキれる、周りの女子いわく「口で落とす系の男子」らしい

二人の原作スタートまでの経緯

二人は基本的にツーマンセルで行動し、束から与えられたミッションをこなす、だが束が間違っているときには、家族間の戦争が勃発するらしい

こんな日々が二年くらいつづいた、ある日、束が試作ISを作っていると、蒼真と一夏が触り、装着したことから束は二人をIS学園に入れる

序章

真つ暗闇の無限地獄で

こんにちは、マクレイドです。

二本の他作品があるにも関わらず、三本目の作品を書いてしまいました、でもな、書いてみたかったんや・・・オリ主と一夏の地獄兄弟、というわけでほんへ、ドゾ

やあ、どうも、俺は一夏、さつきまで千冬姉の試合を兄と見に行っていた（行かされていた）のですが、俺がトイレに行ったら、兄と間違えられて拉致られてしまったみたいです。

.....

何でこんなに冷静かって？そりやあだって、やつと死ぬるんだもん嬉しいに決まってるじゃないですかヤダー

ずっと姉や兄と比べられて、精神が参っちゃいましたね・・このとおり重症ですw

w

まあそんなわけで、周りにいる多分犯人の話聞いてたら、どうやら千冬姉の大会出

場を阻止したいみたいだ。

「何で相手から何の連絡も来ねえんだよ?!」

恐らくリーダーだと思う男が声を荒げる

そんなの当たり前だ、姉は自分を愛していないから

「織斑の落ちこぼれ」と言われた俺に、なにも思っていないから

もし、千冬姉が大会に出れば、あの人は完全に俺を見捨て、目先の優勝を取ったということになる、だけでも俺はちよつと期待してたんだ、千冬姉がそこにあるテレビ画面に写らないことに

でも、やっぱり期待なんてするもんじゃやない、だって今俺の目に写っている画面には最強と名高き、織斑千冬その人が、優勝をかけて相手選手と競いあっていたからだ

その瞬間、俺のなかで何かが切れた、今まで地獄と天国を結びつけていた蜘蛛の糸が切れたように

「まさか?!自分の弟を見捨てたつてののか?!ブリュンヒルデ!!」

「やっぱり兄の方を拉致っておけば良かったんだ!!何で落ちこぼれの方拉致ってきたんだよテメエは!!ああ!」

「顔が瓜二つ何だから仕方ねえだろ!?!．．．ところで」

犯人たちが一齐に俺の方を向く、だけど俺は何も感じなかった

男が俺に一歩ずつ歩み寄ってくる

「ああ・・・もう早く殺してくれ、早く・・・」

俺は心のなかでずっとそう思っていた、一刻も早くこの世界から逃げ出したかった
 神様仏様はいないんだと、俺はここでやつと悟った、もつと早くにわかつていたハズ
 だったのに

「どうせ俺なんか・・・」

男が俺のこめかみに銃を突きつける冷たい金属の温度に俺は何も感じなかった

「じゃあなボウズ、悪いが証拠を残すわけにはいかねえんだわ、安心しろ、一発で済む」
 男が銃の引き金を引こうとしたその時だった、男の頭部が無くなった

男が倒れると、人の形をした緑色のバツタの化け物のようなものが俯いた姿勢で立っ
 ていた

???
 side

「キックホッパー、目標地点に到達、これより織斑一夏救出を開始する」

俺がそう言うのとプライベートチャットから元気な声が聞こえてきた

「了解だよ、そうくん!! いくつか人を殺そうとするやつは全員バラしちゃえ!!」

声の主は篠ノ之束、ISを作った、天災と言われる女性だ、俺は訳あつて彼女のお願いを聞いている。

内容は、「織斑一夏を救出してほしい」というもので、最初は戸惑ったが、やつとこさ完成した新型のシステムを実践できるということで快く引き受けた

俺は速い足取りで織斑一夏が拉致されている廃墟に入るとまず見張りが二人、扉の前で立っていた、その手にはアサルトライフルが握られている

某有名ステルスゲームならデコイや壁をノックする音で誘き出すのが定番だが、現実はそのまはかいかない、なので俺は正面から突っ切ることにした、俺はポロポロの革製コートをなびかせ、見張り目掛けてドロップキックを食らわせた、見張りの一人はその蹴りで壁に激突し絶命、壁に真つ赤なアト作品が出来た、実に美しい、もう一人は仲間が一瞬でミンチになったことで腰を抜かし、俺目掛けて銃を乱射してくる、だが、幸いな事にこのコートは見た目こそポロポロだが、束が作ってくれた特注品であり、防御力は著しい、よつて俺には傷ひとつつかなかつた

「ば、化け物……!!」

まあ、そんな事を思うのも無理はないだろう、想像してみてもほしい、対人に対して最もダメージを与えられる武器、俺の持論だがそれは銃だ、その銃の弾丸を平気で受け止め、歩んでくる男の姿を、正直に言つて化け物だ、相手には悪いが、これも仕事だそう

思いながら俺は、ブーツのかかどにある拍車で男の首を抉った

「ぐえぶえおええああああ!!」

「悪いな、これも仕事だ」

男は言葉にならない叫びを発し、反対に俺は、ゴミでも見るような冷たい目で見ていた

次に、部屋に入ろうとすると、中から怒声が聞こえてくる、どうやら織斑千冬は大会に出たらしい、まあ、俺には関係のない話だが

そう言いながら俺は腰に装着していた銀色のバックルを開く、すると、何処からともなく機械的なバツタのようなものがーくホッパーゼクター>が音を発しながら跳ねてきた。

俺はそれを左手で掴み、緑色の面を外側にしてバックルに差し込む。

「変身」

[HENSHIN]

[CHANGE]

[KICKHOPPER]

電子的な音声がなり、俺は仮面ライダーキックホッパーへと変身した。

「クロックアップ」

[CLOCKUP]

.....

俺はバツクルのスイッチを押した、すると世界が止まった

い
敵密には止まっているのではなく、俺が超高速で動いているのだが、今はどうでもい

扉を蹴破り、織斑一夏に銃を向けている奴から先に頭を飛ばす、それから他のやつ、
頭を、胴体を、腕を、足を、そして心臓を、次々と蹴り壊していく

[CLOCKOVER]

音声になると、世界は時間を取り戻し、犯人たちの血が雨のように降り注ぐ、彼に、織
斑一夏には俺がどう見えただろう？自分を救ってくれた正義のヒーローか、はたまた、
人の血を浴びる化け物か、俺はバツクルからホッパージェクターを外し、生身の人間に
戻った

一夏 side

どういうことだ？

俺は椅子に縛られたまま、訳がわからなくなった、突然男の頭が飛んだと思ったら、辺
り一面が血の海で、目の前の化け物が人になった、けど俺はそれを惨いとは思わずにむ

しろ美しく思えた

「お前が織斑一夏か・・・俺と同じ目をしてるな、よし決めた、織斑一夏、いや、影山一夏、俺の弟になれ、俺と一緒に地獄に堕ちよう」

男は、俺の縄をほどくと、そう言った答えは「つーYesだ

織斑一夏は死んだ、これからは、この人から貰った名前で生きる、影山一夏、それが俺の名前だ

「わかった、俺は今からあんたの弟だ、よろしくな、兄貴」

俺に新しい家族が出来た

行き着く先は

どうも、皆さんマクド●ルドじゃなかった、マクレイドです

やべえ、やべえよマジやべえ、何がヤバイって？マジでヤバイんだよ

という冗談は置いておいて、皆さん、沢山のお気に入り&UAありがとうございます
!!

まだ、タイトルも正式に決まってない中ですが、何卒よろしくお願いいたします！

(タイトル募集中なので気軽に提案してください)

ではほんへ、ドゾー

蒼真 side

よう、矢車蒼真だ一応前回ではキックホッパーに変身してた奴だ、つて俺は誰に紹介してんだろ？まあいい

「なあ、兄貴」

ふと、一夏が話の空気を変えてきた、こういうときは大事な話をするときだ、心して聞こう

「何だ？」

「俺たちちゃんとIS学園入れるのかな？」

と一夏が珍しく弱音を吐いたそれもそうだろう、この学園には一夏の姉が教師をしていて、兄と一緒に入学してくる、一夏なりに不安があるのだろう

と、一夏の問いを返せないまま、俺たちはIS学園についてしまった

何故IS学園に来たのかというと、バレちまったんだ、俺たちがISを使えることが、束には反対したがIS学園に入れと言われた、こればかりは仕方がない
俺たちは正門を抜け、校舎へと向かうと教員らしき人物が待っていた

「影山さん、矢車さん、ようこそ、IS学園へ」

最初に話したのはパット見五十代後半のじいさんだ、恐らくは校長だろうか、すると両脇にいた女二人がいきなり俺たちに殴りかかってきた、が俺たちはそれをかわし、俺は腹に回し蹴りを、一夏は顎にアッパーをそれぞれの女に叩き込んだ

どうやら、ここにいる一部の生徒&教師には俺たちは都合が悪いらしい
それを察したのか一夏が口を開く

「何いきなり殴りかかってきてんだよ雌豚が!!ああwwそつか俺たち男だもんな?ハッハ!!兄貴傑作だぜこいつは!!そうだよなあ?今まで屑と思ってきた男に不意打ちで返り討ち食らって、しかもソイツがお前らの力の象徴(笑)のISを使えるんだもんな!?

そりゃあ悔しいよなあ？」

「いやあああああ!!?!」

女は精神が限界を越えたのかその場で気絶した

言うのを忘れていたが、一夏は超が着くほどのDSだ

「一夏、止めろ」

俺が一言そう言うと「わかったよ兄貴」といつて直ぐにやめた

「我が校の教師が・・・失礼な事をして申し訳ない」

「別にアンタは悪くないだから頭を上げてくれ、校長」

「しかし、困りましたねえ、あの二人にはあなた方の相手をしてもらいたかったです

が・・・」

「その役目、私にやらせてください」

声が聞こえると、物陰から女が現れた

「(・・・!!この女は・・・)」

俺はこの女に見覚えがあった、忘れもしない、あの女だ、水色の透き通るような髪、真つ赤とまではないかいないが、紅い眼、凜とした顔立ちには誰が見ても美人と云うだろう、この女をはつきり覚えている、更識刀奈

「・・・」

「あら？何かしら？私の顔に何か付いてる？」

「何でもない」

俺はどうやら、更識刀奈の事を見つめていたらしい

一夏の視線が強かったから、顔をそらした、だがそこに嫉妬などは乗っておらず、純粹な好奇心と探求心によるものだった

「お前は良いよな・・・まだそんな感情があつて、俺の感情なんてもうとつくに渴れはてた」

そんなことを心中思いながら、俺は更識刀奈の申請を甘んじて受けた

楯無 side

皆どうも、更識楯無よ

今日は世界初の男性のIS操縦者が来るって聞いたから来てみたんだけど、驚いちゃったわよ、だつていきなり殴りかかってきた教員を一撃で轟沈させた後の言葉攻め・・・恐ろしい子・・・!!

.....

何よりも驚いたのが、彼——昔は違う名前だったけれど、矢車蒼真、彼、物凄く強くなつてるとじゃない、さすがのお姉さんも驚いちゃったわよ。

そんなわけで、今私は二人に第一アリーナまでの道案内をしているわ
二人の道案内を済ませた後、私も着替えないと

三人称 side

第一アリーナ、ここである兄弟の力量が試されようとしている。この時は地獄兄弟は知らないが相手は学園最強の生徒会長の座を持つ更識楯無だ、しかし、彼女が学園最強であるとすれば、彼らは――地獄兄弟は闇の世界の最強である、しかし彼女は、王者ゆえの余裕のつもりか、「二人同時」を申請してきたのだ

「何だ？更識、舐めプのつもりか？」

「いいえ、私は純粹にこの学園の生徒会長として、あなたたち二人の力量を知りたいの、気分を害したのなら謝るわ、ごめんなさい」

「どうするんだ？兄貴」

「・・・わかった、こっちは二人でアンタに挑むとする、その代わり・・・」

「その代わり？」

「後悔はするなよ、行くぜ？相棒」

「ああ、兄貴」

二人はボロボロのコートをなびかせながら、腰に装着している銀のバックルを開い

た、するといつも通りホッパパーゼクターが跳ねてくる。まるで、兄弟が揃うのを嬉しがるように

地獄兄弟は蒼真が緑の面を一夏がブラウンの面を前にしてバックルに差し込んだ

「・・・変身」

「変身」

・ H E N S H I N ・

・ C h a n g e K i c k H o p p e r ・

・ C h a n g e P u n c h H o p p e r ・

地獄兄弟はそれぞれ、仮面ライダーキックホッパー、仮面ライダーパンチホッパーへと変身した。

先に仕掛けたのは楯無だった、蒼龍旋に内蔵されている四門のガトリングで蒼真たちを容赦なく打つが、何発か地面に当たり砂ぼこりを上げている、視界がかすみ、楯無は蒼真の攻撃に反応できずに直撃し、壁に激突した。

「(何てパワーなの!?! S E がもう半分を切った!?!)」

楯無はこの時初めて認識した、この二人は本気でやらねばならない相手だと、そう思った。

「(じゃあ・・・私も本気を出さなくちゃね!!)」

蒼真はこの状態を少し変に思っていた、何故反応出来たハズの攻撃を敢えて受けたのか、そして何故開幕直後からガトリングで自分達を撃ってきたのか

「まさか・・・もしあのガトリングの銃弾がミステリアス・レディのナノマシンだとしたら・・・そおいうことか」

楯無は開幕直後から布石を打っていた、ミステリアス・レディのナノマシンだ、あれを銃弾に変換し、砂の中に潜り込ませる

「(そして!!)」

「(だとしたら!!)」

瞬間、二人の思考が一致した、砂中からミステリアス・レディのナノマシンが飛び出し、二人を拘束した

ーハズだった、なのに何故か二人は楯無の目の前に立っている、SEが尽きた事を知らせる警告が出ている、そしてー試合終了のブザーが鳴った

地獄兄弟 side

「(だとしたら!!)」

蒼真は心底焦っていた、こんなに焦るのは久々だ、何せあの更識がこんな狡猾そうな女には見えなかったからだ

ナノマシンが砂中から飛び出し俺たちを拘束しようとしていた

「(間に合わねえ!!仕方ない・・・)」

俺はバツクルにあるスイッチを軽く撫で、こう言う

「クロックアップ」

・Clock up・

その音声が鳴ると、世界が止まる、ナノマシンが出てきたことよって舞った砂も、止まる

俺は一夏の所に行き同じボタンを撫でる

「つつ?!?兄貴?!?」

「一夏、危なかったな、もうちよつとでアイツに地獄を見せられないところだった」

「そうだな、ありがとう兄貴」

このクロックアップシステムは、自分を超高速で動けるようにする魔法のシステムだが代償は大きく、発動している間はエネルギーがどんどん無くなっていく、並のISならエネルギーのキャパシティが足りずに一秒と持たないだろう

俺たちはそのまま静止している更識のもとにむかいホッパーゼクターの足を上げる、俺は右に、一夏は左に

「・・・ライダージャンプ」

「ライダージャンプ」

・ Rider Jump ・

そのまま俺たちはジャンプし、伸びが終わるとホッパーゼクターの足を戻した

「ライダーキック!!」

「ライダーパンチ!!」

・ Clock Over ・

上空から一気に必殺技を放ち時間の流れが元に戻る

恐らく更識のISのSEがゼロになったのだろう、試合終了のブザーが鳴った

その後俺たちは入学手続きを終えた、筆記は色々ひどい有り様だったが、実技は勿論満点である

「さあ、行くか相棒、更なる地獄を見に」

「ああ、兄貴となら、何処までも」

1章

地獄のような

よう俺だ、矢車蒼真だ、実は今なすげえ見られてる、何故かって？そりやあな

「なあ、兄貴」

「何だ？」

「動物園のパンダとかってこういう気分なのかな？」

理由は簡単、ここがIS学園だからだ、本来ISは女にしか操縦できない、だから周りには俺たち兄弟+αを除けば全員が女だ、前に知り合いにIS学園に入学することになったと言ったときには「リアルハーレム野郎」などと訳のわからない事を言われたが、それは間違いだ

「相棒、この地獄、お前ならどう切り抜ける？」

「兄貴、ここは頼めるかな？」

一夏が俺を見つめてくる、できれば「アレ」はやりたくないんだがな・・・仕方ないか

「おいお前ら、見てんじやねえぞ、散れ」

俺が少し殺気を滲ませそう言うとおい!?何人か倒れて・・・

「兄貴・・・やりすぎだよ・・・」

と、一夏に注意された、これでも加減したんだけどな・・・

程なくして教室のドアが開いた

入って来たのは当然だが女だ、髪は鮮やかな緑で身長は低い、なんだか胸に身の丈以上のものが実っている気がするが、今は気にしないでおこう、これが噂のロリ巨乳というやつか・・・悪くはない

「ええと、みなさんこんにち・・・わ?」

まあ、驚くのも無理はないだろう、クラスの大半が失神or失禁しているのだから、これで驚かない奴がいるとするならソイツとは手合わせ願いたいくらいだ

「ええと、皆さん起きてください!!ホームルームを始めますよ!!」

ロリ巨乳先生がそう言うのと大半が起き上がったが、何人かはまだ伸びているみたいだ

秋水 side

やあ、出来損ないの弟の兄で天才の織斑秋水だよ

さてビックリだ、入学式を終えて教室に来ただけけどあの出来損ないがいるじゃない

か!!とつづくに死んだかと思ってたよ、今は「影山」って名字を名乗ってるらしいけど、織斑とは縁を切ったつもりなのかな? まあ、どうでもいいけど、それに・・・隣にいるのは、確か矢車蒼真くんだったかな? まあ、天才のボクにとつてはなんの障害にもならなそうな男だから、どうでもいいか

と、思ってた時期がボクにもあつたよ、な、なあにビツクリしただけさ(少し漏らしてしまったけど)

蒼真 side

ホームルームが始まり、テンプレで自己紹介が始まった

「織斑くん!!織斑くん!!」

「聞こえますよ山田先生、わかっています、ボクの名前は織斑秋水、天才だよしボクとお近づきになりたい人が居たら遠慮なく声をかけてね?皆相手してあげるから」

キヤアアアアアア

教室内はそんな黄色い歓声で包まれた、ていうか俺たちの耳がヤヴァイ、鼓膜破れそう

どんな感性してたらあんな自己紹介出来るんだろうな?ご教授願いたいね(大嘘)

教室内がまだざわついていると、ドアが勢いよく開かれた、女どもの声もそうだが

こつちもこつちで耳がヤヴァイ

入ってきた女は・・・ブリュンヒルデ、織斑千冬だった、おいおい相棒、眼のハイライトが消えてるぞ

織斑千冬は教壇の前に来るといきなり自己紹介をし始めた

「織斑千冬だ、これだけは言っておく、私の言うことに逆らうな全て Yes と答えろわかったか？」

また教室内が黄色い歓声で包まれた、ああ、鼓膜破れそう、山田先生涙目になってる・・・可愛い

「もう時間がない、影山、矢車、貴様らが自己紹介をしろ」

俺たちは気だるそうに立ち上がった

「ハイハイ、わかりましたよ、ブリュンヒルデさんww」

「アンタに命令されるのは生け簀かないけど兄貴がやるなら、俺もやる」

「・・・貴様ら、今回だけはサービスしてやる」

ブリュンヒルデ(笑)が忌々しそうにそう言う俺たちは自己紹介を始めた

「矢車蒼真だ、そうだな・・・趣味はトレーニングやプラモを作ることだ、嫌いなものは女尊男卑の奴ら、あと言っておくが、俺も相棒も彼女持ちだ、残念だったな」

そう言っ俺は席につく、何人かは机に何度も頭を打ち付けている・・・頭大丈夫か

？（いろんな意味で）

続いて一夏の自己紹介だ

「どうも、影山一夏です、趣味は兄貴と同じでトレーニング、あとは木工などです、嫌いなものは兄貴と同じく女尊男卑の奴ら、あと“家族を大事にしない奴”です、さつき兄貴が言ったけど彼女持ちです、以上です」

一夏のとくも変わらず、教室内に拍手は響かない

でも最後の“家族を大事にしない奴”っていうのは多分織斑兄弟に対して言ったのだろう

多分俺と織斑兄弟だけが、その言葉の意味を理解していた

一夏 side

皆どうも、影山一夏です、どうだったかな？俺の自己紹介、ちゃんと元姉兄に伝わったか心配だ

ホームルームが終わって帰れるかと思いきや授業だつてさ、本当にイヤになるね、でも幸運な事に今回の授業の担当はロリ巨乳先生こと山田先生だ、ハッキリ言つて超わかりやすい、一応束姉に予備知識を1から100まで教えてもらったけど、この人の教え方は上手すぎるそれこそ束姉に勝るとも劣らないくらいに

授業が終わつての休み時間、兄貴と二人でポーカーやつてたんだ、そしたら変な奴が

話しかけてきた、名前は確か・・・モツプだったかな？

「二夏、少し顔を貸せ、話がある」

「悪いけど俺はアンタみたいなT H E日本女児なんて知らないから付いていく義理はないな、あ、ストレートフラッシュだぜ兄貴、昼飯奢ってくれよな！」

「何!? 貴様!! 私を忘れたのか!? バカにしてるんだろ!? なあ!?」

あまりにもモツプがピーキヤー煩いのでこう言つてやったんだ

「アンタが言つてる織斑一夏なんてこの世界の何処にもいないよ? 彼は死んだんだ、無情な姉兄のせいでね、言つておくが俺は影山一夏だ、織斑一夏なんて言う男は知らない」
「ツツ!! バカにして!!」

モツプは何処からともなく木刀を取り出して俺を殴ろうとするけど、
“モツプが倒れた” 俺が殴る前に

蒼真 side

「(ああもううるせえな!! 黙つてろよモツプ野郎!!)」

俺は心底イラついていて、一夏に負けたのもそうだが(なんであの場面でスピードのストレートフラッシュなんか出るんだよ・・・)モツプが煩い、さつきから訳のわからない事をピーキヤーピーキヤー・・・

すると、何処からともなくモツプが木刀を取り出した、そして一夏に殴りかかったが俺が顔面目掛けて蹴った、(勿論手加減はしたがな)すると一撃でノックアウト、はあく弱いなあ

伸びたモツプ(笑)を回収しにきたのか、1人の男が近寄ってきた相棒の眼からハイライトが消えていく、こいつに対して言うことは1つ

「消えろ」

俺たちは織斑に向かつてそう言った

キーンコーンコーンコーン

チャイムが鳴ると織斑はモツプを連れて自分の席に戻った

く次の休み時間く

「兄貴」

「何だ? 相棒?」

「何か縦ロールがこつち見てる」

あ、ホントだ見事なまでの縦ロール、そして金髪、その女はそのままこつちへ歩いてきた

「もし、そこのお二方、もしよければわたs「いらん、消えろ」ヒエツ・・・」

金髪縦ロールはそのままトボトボと席へ帰っていた

授業が始まった、どうやらクラス代表を決めるらしい、ようは学級代表みたいなもんだ、まあ、俺たちはいかねえけど

「自薦他薦は問わない、誰かやる気のある奴はいないか？」

ミスブリュンヒルデ（笑）がそう言うと言想されていた事が見事に的中した

「私は矢車くんを推薦します!!」

「私は影山くんを!!」

「じゃあ、私は織斑くんを!!」

「誰かいないか？いなければこれで投票する」「ちよつとお待ちください!!」なんだ？」

あ、さっきの縦ロールだ

「何故この私が推薦されないのですか!?!イギリス代表候補生である、この私が!!ただでさえこんな極東の遅れた島国でストレスも溜まっているというのに・・・」

「（はあ、相棒、任せた、俺は寝る）」

「（わかったよ兄貴、終わったら起こすよ）」

一夏side

さてさて、やってきました俺のターン!! やってやろうじやないの

「さて、イギリスの代表候補生さん、問題だ、アンタは今どこの国の敷居を跨いでいる？
ついでに言うならば、周りにはなに人が居る？そしてISの産みの親はの出身国は？さ
あ、答えろよ」

「あ・・・」

イギリスの代表候補生さんは周りをキョロキョロと見渡し、顔が青ざめていく

「(トドメはこれだ)」

ここで俺は1つのボイスレコーダーを取り出した

「さて、イギリスの代表候補生さん？ここにさっきの素晴らしい演説の音声ギッシリ
入ってる、これをイギリス政府に流せばどうなりますかねww」

イギリスの代表候補生さんの顔がまた青ざめていく、もはや血色が感じられないほど
に

「・・・ですわ」

「ん？何だつて？」

「決闘ですわ!!影山一夏さん!」

おいおいマジか、まあいいけど

とここでバカ姉がクツサイ口を開いた

「ではクラス代表はセシリア・オルコット、影山一夏、矢車蒼真、織斑秋水の四人による

試合で決める、異論は認めん」

「チヨ！チヨットマツテクラサイヨオリムラサン！」

何かへんな言葉になった

その後「異論は認めんといったはずだ」という強引な口調で終わらせられた
ああ、寝てる兄貴にどう説明しよう？

With in the dark

よう、矢車蒼真だ、さつきまでバカ（縦ロール）が名演説（笑）をして面倒だったから相棒に頼んだんだが・・・どうしてこうなった？

状況を説明しよう、まず相棒に起こされてすげえ申し訳なさそうな顔で

「ごめん兄貴、しくじった」

とだけ言った、相棒に限ってそんなことは無いと思ったが、そんなことはあつた

矢車vs影山vsオルコツトvs織斑

代表者選抜戦メンバー

とでかでかと黒板に書かれていたのだ思わずナジエダ!? ナジエダ!? と叫びたくなつたが必死に堪えた

俺が起きたのに気づいて山田先生が小走りで近づいてきた、おお・・・揺れる揺れる、すっげえ涙目で

「矢車くんすみません、こんなことになってしまつて」

「いいですよ、推測ですけど織斑先生が提案したんでしょ? こんなバカな事、全く江戸時代じゃねえだから・・・」

「まあ、代表者選抜戦を提案したのは織斑先生だけど、決闘しようって言ったのはあの縦ロールだぜ？ 兄貴」

それを聞いて俺はもつと頭が痛くなった

「とりあえず、相棒、特訓でもするか？ アイツは頭はアレだが代表候補生、つてやつなんだろ？ 山田先生？」

「は、はい！ オルコットさんはイギリスの代表候補生で、BT武装を搭載した中距離型のISであるブルーティアーズを使っています」

と、聞いてもいないのに説明をしてくれた、非常に助かる、それにしてもブルーティアーズ・・・蒼い雫か、イギリスも洒落た名前を付けるもんだ

「山田先生、助かりました、これでアイツを墮とせる」

「アツ・・・つい癖で言ってしまった、生徒は平等に扱わないといけないのに・・・」
「考えてみてみてくださいよ山田先生、素人とプロじゃ平等もクソもありませんよ」

相棒がそう言うのと山田先生は

「そうですね・・・そういうことにはしておきましょう」

と言ってまたいつものような幼い笑顔に戻った

放課後になり、俺たちは特訓をするためにアリーナへと向かった、何だか申請書？ み

たいのがあったが山田先生が引き受けてくれた、うん、今度飯でも奢ろうそうしよう

「なあ、兄貴」

「何だ？相棒」

「今日はどんなメニューで行く？」

「ああ、今日とはかく回避だ、山田先生情報だったら相手はビット装備、オールレンジアタックを仕掛けてくるはずだ、だったら、徹底的に避けてエネルギー切れを狙うか隙を逃さずに重い一撃を叩き込むかどちらかだ、さしづめ今日は、C―12番だ」

今俺が言ったのは特訓メニューの番号だ、俺たちは日頃から特訓をしているから、番号を振ってある、A、B、Cの順番にキツく、難しくなっている

Aは基礎練、基本的に筋トレや走り込みが中心でBは戦術、Cは模擬戦といった形だ
今回俺がチョイスしたのはC―12番これは相手が遠距離武装型を想定して、回避に全振りしたメニューだ、基本的に攻撃はせず、一人が攻撃するのをもう一人が避け続ける、制限時間は10分、それまでに攻撃する側は相手に一撃を叩き込めれば攻撃する側の勝利、10分間逃げきれば、逃げきった方の勝ち、そんなルールだ
「わかったよ、今俺って兄貴に何勝だったっけ？」

相棒が首を傾げる、ゲームやアニメだったら頭の上には？マークが出ていると思われる

くらいに

「俺が35338勝3158敗、お前が35148勝3348敗だ」

俺は一切口ごもることなく勝敗数を言う、勝負事に対しては結構根にもつタイプなのだ

相棒は周りからしたら俺より劣っている、そんな印象を持たれがちだが、それは大間違いで、実際、成長率は俺より上だ、後少しで、俺を越すだろう

そうこうしているうちに、アリーナの更衣室に着いた、俺たちはISスーツの代わりのポロポロの服を着る

服に袖を通すと、安心感に包まれる、まるで恋人の寝顔のような、そんな安心感、そういうえばアイツは元気にやっているだろうか

俺の恋人・・・布仏本音と更織簪は、あの家で上手くやっているのだろうか？
そんな事を思いつつ、俺たちは準備体操を始めた

秋水 side e

やあ、皆、織斑秋水だよさつきはビックリしたさ、急に決闘だなんてね？笑っちゃよ全く、あの出来損ないが余計なことをやらなけりやこんなことにはなつてなかったの
にね

ところで、山田先生とあの二人が何か話をしてるみたいだ・・・何々？特訓？これは面白い、あの二人の戦いがどんなに無様な物か、見に行ってみよう

（秋水移動中）

さてと、アリーナに着いたんだけど・・・なんだい？この轟音は？銃撃？それとも剣撃か？まさか、武器もない格闘戦でこんな音が出るわけがないよ・・・ね？

観客席に出たとたん、僕の考えは変わる、轟音の正体は銃撃でも剣撃でもなかった、アリーナの中心で半径6m程の円が引かれていて、その更に中心、緑と銀の戦士が戦っていた、厳密に言えば緑の男が避けて、銀の男が攻撃している、その銀の男のパンチの度に、アリーナが揺れ、空気が震えている、体の奥底まで伝わってくるほどに

「アイツ・・・出来損ないじゃ・・・なかったのかよ!!」

僕はとたんに、掴んでいたフェンスを思いっきり叩いてしまった、銀の男のパンチの轟音ほどではなが、それなりの音が響く、その音を聞いてか、二人の戦士がこちらを向いた

一夏side

よう皆、影山一夏だ、今兄貴と特訓してるんだけど、やっぱ兄貴はすげえよ、俺の攻撃なんて一切掠りもしないんだから

そんな時間を楽しみながら過ごしてただけど

「アイツ……出来損ないじゃ……なかつたのかよ!!」

ふいに……そんな声が聞こえて来る、世界で一番聞きたくない声の一人だ、俺の元兄、織斑秋水、勉強スポーツ共に優秀、テストは毎回満点近い点数を誇り、運動も何でも出来る、言わば“天才”

そんな兄に比べられた幼少期、本当に嫌だった

何かをしたいと言えば、「才能を溝に捨てる気か!!この恥さらしめ!!」と罵られ、テストで高得点を取っても誰にも褒められない、自分の唯一の価値は、家事だけ、そんな生活だった、思えば、兄貴に助けられて救われたんじゃない?俺?

とにかく、声の主はやつぱり、俺の元兄、織斑秋水だった

「ああ、アイツか……」

兄貴が気だるそうに織斑の方を見つめる、いや、正確には睨み付けている

「一夏!僕と勝負しろ!!」

聞きたくもないアイツの声が響く、屋外ならまだマシだったのかもしれないが、生憎ここは屋内アリーナ、かなり響く

俺は薄気味悪い笑みを浮かべヤツに挑発する

「勝負?ひよつとして今お前俺と勝負したいと言ったか?ハハハ!!こいつは笑えるな

!!

「貴様……！何が可笑しい!!」

俺は笑い終わると言葉が続ける

「いいか？勝負つてもんは対等な実力を持った者同士が出来る、神聖なもんだ、お前は今、大きな勘違いをしている、何時から俺とお前が対等な実力だと勘違いしてたんだ？あ、ひよつとしてそれにさえ気づいてなかったのか？滑稽だな」

ハイパーセンサーで織斑の顔を見ると、血管がびくついている、いやー本当に滑稽だね
ww

「僕がお前に劣るとでも言うのか？出来損ないに？この僕が？天才のこの僕が!」

「ソコがテメエの悪いところだ、全ての他人を始めから見下す、自尊心の塊、いやー吐き気がするね」

俺は相変わらずヘラヘラと薄気味悪い笑みを浮かべている

「貴様……!!」

織斑が何かこつちをスゲエ眼光で睨んでくる、あー怖い怖いww

「(これ以上続けてもムダか……もうちよつと遊びたかつたけど、まあいいか)」

心の中でそう思うとプライベートトチャットを開く、相手はもちろん、兄貴だ

「兄貴、ちよつと待たせるけど、いいかな？」

「ああ、俺もムカついてたんだ、思う存分やってこい」

俺は兄貴の承諾を得ると、織斑に向かつて中指を立てながらこう言った

「come on! self proclaimed genius! I'll do it discipline you! (来いよ! 自称天才! 俺がしつけてやるぜ!)」

「貴様・・・!」

中指を立てられてキレたのか、俺の英語に対してキレたのかはわからないが、織斑はそれはもう怒り心頭だった

三人称 *side*

その後秋水は打鉄を纏い、アリーナへやって来た

「なんだい? そのボロボロのコートは? 無様だね! 笑えるよ」

と、挑発紛いのような発言をしたが、当然俺には何の効果もない

次の瞬間に秋水が驚きの行動をした

「こんなチャチな銃なんていらぬ、貴様を倒すにはこれ一本で十分だ」

と言って、打鉄の唯一の遠距離武器を捨てた、そして刀を構える

「ああ、やつぱりその構えか・・・」

一夏は心の中でため息をつく、昔自分が捨てた剣道の流派の構えなど、見たくないのだ

そして、腰に付いた銀のバックルを開く、するといつものようにホッパージェクターがやって来る

「変身」

〈H E N S H I N 〉

〈C h a n g e P u n c h H o p p e r 〉

ただ一言、そう眩きホッパージェクターをバックルに差し込む、すると六角形の斑点が一夏の体を包む、そして一夏は先ほど秋水が目撃した、白目と銀色の戦士、仮面ライダーパンチホッパーへと変身した

先ほどの嫌悪感の気持ちをまぎらわせるために、一夏は秋水に話かける

「なあ、織斑」

カウントダウンが始まる

3

「何だ？開始直前に話かけるとは随分余裕じゃないか」

皮肉が混じった声、だが一夏はそんな言葉も無視して話す

2

「さっき俺は“勝負つてもんは対等な実力を持った者同士が出来る神聖なもん”って言ったが、“対等じゃない”者同士がすればどうなると思う?’」

1

「それはな・・・」

0

「一方的な蹂躪だ」

瞬間、秋水の視界から、“一夏は消えた”

「ッ!?!?」

秋水は瞬間的に悟った、いや、“悟ってしまった”こいつには、一夏には勝てないと
 「(何処から来るんだ!?)」

イグニツションブースト並みの加速、それは運動においても天才と呼ばれた秋水にさえ、見ることが叶わなかった、ただ感じるのは、気配と殺気だけ

だが、秋水は知らないが、この加速はイグニツションブーストではなく、一夏の脚力だけで加速している

「(それでも!!)」

そう思い、気配のする方へ剣を振るうが当たりはしない、代わりにブウンブウン

と空振った音が聞こえるだけ

「(何もかもが甘いんだよ!)」

一夏は一気に加速し秋水の懐に潜り込み、渾身の一発を与えようとしたが・・・

そこで試合終了を告げるブザーが鳴る、何故だ?と一夏は焦るが秋水は対照的に助かったという安心感で包まれていた

「試合は終わりだバカ者ども!!さっさとISを解除して戻れ!!」

世界で最も聞きたくない声のヤツが一人増えた、クソが

少し、と言うか大分無理矢理な終わらせ方ですみません!

あ、あと設定に書き忘れていましたが、一夏は相手を挑発するときに、たまに英語になります(デビルメイクライのダンテミみたいな感じ)

感想、高評価、よろしくお願いいたします

近々地獄兄弟の設定を少し追加するので良ければ見てください

(ちなみに、この時点ではまだ本音と簪はIS学園に通っていません、さあ、何故でしょう?)

明日を見るのは

???
side

「こちらα、そつちの様子はどう?」

私は冷たい無線に向かって話しかける、程なくして無線から砂嵐の様な音が鳴り、向こうの声の主が答える

「こつちらβく相変わらず異常なしだよ」

大分府抜けた、だけど元気な声が聞こえ、私は少し笑ってしまった、此処は敵陣のど真ん中だというのに、彼女の声を聞くと安心して、笑ってしまう

「(貴女は無能でいなさいな)」

昔姉に言われた言葉が脳裏に浮かぶ、汗が滲み出る、手が震え、手に握られている銃がカタカタと鳴る、だがそれと同時にある男の子の顔が浮かぶ、私と、無線からの声の主が好きになった男の子が

彼はとても世界を憎んでいてひねくれている、だけど凄く優しいし、頼りになってくれる、そんな人

その男の子は、無能と言われた私を救ってくれた、私だけじゃない、無線の向こうの

声の主もだ

「(アンタらは無能なんかじゃない、人は何かをして、何かを夢に見る、それを笑うやつがいたら、もうそいつは人間じゃねえ、だからさ、こんな腐った世界を笑え、笑えよ、笑ったら、人間なんかかなる、笑えなくなつたときが、一番怖い、だから笑って、明日を生しろ)」

彼の言葉が頭をよぎる、彼はあそこで、IS学園で上手くやっているだろうか？そんな思いを滲ませながら、私は今日も、“笑って”戦場を駆ける

蒼真 side

「へっくしゅ!!」

授業中、盛大なくしゃみを俺はしてしまった、皆の視線がやたら痛い・・・正直なところ、メツチャ恥ずかしい、顔から火が出そうなくらい

ツンツン

隣の席の相棒が俺の腕をつつき、紙を渡してくる、その紙には

兄貴、風邪か？

とでかかどと書かれていた、俺は紙の裏を使って

大丈夫だ、問題ない

とだけ書き、相棒に投げる、すると相棒が見事なグツジョブサインをして授業に集中した

しかし、誰か俺の噂でもしてんのか？

それが悪評では無いことを祈りつつ、俺は授業に戻った

三人称 side

「(負けた負けた負けた負けた負けた負けた負けた負けた負けた!!!)」

秋水は授業にロクに集中せずにただ「負けた」というワードだけを頭の中で繰り返して、そしてノートに呪いのように二人の名前を・・矢車蒼真と影山一夏の名前を書いていた

秋水は自分から挑んだ勝負に負けた、しかも自分より格下と思っていた元弟、一夏にだ、圧倒的差をつけられ、一方的に、それは、一夏が言っていた「蹂躪」に他ならなかった、そして秋水はプライドが他人より倍高い、そのプライドが、秋水自身を狂わせていた、秋水は今まで、姉意外には負けたことがなかったのだ

「(影山一夏!! 矢車蒼真!! 必ず潰す!!)」

そんな狂気にも似た殺意に駆られ、秋水は狂っていく

「(貴様があんな無能に負けるなど、恥を知れ!)」

姉に、織斑千冬に言われた事が一切途切れることなく頭に流れ続けている、それはまるで呪いのようだ

余談だが、授業中、山田先生はずっと涙目で授業をしていたとき

蒼真 side

時は過ぎて放課後、俺は寮には帰らず、屋上でケータイを片手にコーヒーを飲んでい
る、もちろん、ブラックでだ

ケータイの時計が午後5時を指す

「そろそろか」

俺が孤独に呟くとケータイが振動する、その画面には“束”とだけ表示されていた

俺が電話の受話器が上がっている方のアイコンをタッチすると、いつもの元気で明るい
声が聞こえた

「やあやあそうくん!!元気にしてたかな!?束さんはそうくんといつくんがいないせいで
寂しいよ」

「心配しなくても、クロエがいるだろ?迷惑かけてねえだろうな?あと、相棒のほうが寂
しさの倍率高いだろ、絶対」

「え〜?そうくん妬いてるのかな〜かわいいやつめ〜!でも生活は大丈夫だよ!?

ちよつと実験でハマしちやつて床が真つ黒焦げになつただけだから!!安心して!!」

声の主は篠ノ之東、俺の命の恩人であり、家族でもある（ついでに言うど相棒の彼女その1だ）

俺は頭を抱えてうなだれる、東に生活力とかその他もろもろが無いことがわかつてはいたが、これ程とは・・・（床が真つ黒焦げについては、常軌を逸している）

俺が頭を抱えていると、声の主が変わる、クロエだ

クロエは相棒がクソみたいなドイツの実験場から助け出した試験管ベビー、（ドイツの科学は世界一イイイイ!!なんてよくいうぜ）名前が無かつたので俺がつけた、以来、ずっと家族のように暮らしている（ちなみに、相棒の彼女その2だ）

「蒼真様、そちらはどうですか?お友達は出来ましたか?」

「いや、友達はまだいねえ、だが、面白そうな奴らは何人かいる、セシリアって奴なんだが」

その後俺は家族との会話を楽しんでいると、相棒がドアから入ってきた

「お、兄貴、もう始まつたのか、悪い遅れた」

「おう、今ちようどクロエが出てるが、話すか?」

俺はケータイを相棒に差し出す、相棒はそれを受け取り、話始める、あの恋人三人は会話になると、甘い、とてもとても甘い、だからこうして話をするときはブラックコー

ヒーを常備している

久々に聞いてて思ったが、ブラックコーヒーがこんなにも甘く感じたのはいつぶりだ？

時は過ぎて、もう時間になってしまった、東は国際氏名手配犯に認定されてしまっているため、あまり長く会話していると、足がついてしまう、その為一週に一度、こうして話している

「相棒、もうそろそろ時間だ、貸せ」

「わかったよ兄貴、じゃあなクロエ、また」

「はい、一夏様、また」

相棒がそう言うのと、ケータイを俺に差し出す、通話を切ろうとしたが東がストップかけた

「そうだそうくん、そろそろあの子たち、IS学園に来るから、よろしくね！」

「おい東、どういうk「ブツ ツーツー」切りやがった」

あの子たちとは、誰の事だろう？もしかしたら・・・いやいや、そんなわけがない

「どうしたんだ？兄貴、行こうぜ？」

「ああ、戻ろう」

俺は考えを打ち消すように、寮の自室へと向かった

三人称 side

IS学園の校門前、そこで二人の少女が立っている、1人は鮮やかな水色の髪の毛をしており、付けているメガネからは、真面目そうな印象がうかがえるだろう、しかしその容姿は、どこか生徒会長である、更識楯無を思い浮かべるだろう、たいしてもう1人は、どこかふわついていて、見ているだけで眠くなつてきそうな容姿で、制服はダルダールで袖が余っていて、手は見えない

「やつと来たねIS学園」

「そだね、イツチーと蒼真、ちゃんとやってるのかなあ?」

そう言いながら眠そうな少女はおっとりした口調で話す

「あの二人ならちゃんとやってるよ、きつと」

「そだね、あの二人だもんねえ」

「東さんに感謝しないとね」

そう言いながら二人の少女は、校門を抜けていく

久々の投稿なのにメツチャ短くてすみません!!

これもすべて乾巧ってやつ^の仕業なんだ

嘘ですすみません、実は今春から高校生になりました、そのせいで忙しくて中々時間が取れないのです、なので、見てくれているかたには大変申し訳ありませんが投稿が本当に遅くなります

色々謝ったところで、今回は終わりです、see you.

廻る世界

蒼真 side

「貴様ら席につけ、ホームルームを始めろ」

いつものように織斑千冬がクラスに号令をかける、それに従うのは少し・・・というが大分癪ではあるが、俺と織斑千冬が衝突すれば、山田先生が涙目になるので、彼女の為にもいつも我慢している、相棒も同様だ

「今日は転校生を紹介する、二人とも、入れ」

「(転校生? 東が言ってた) あの子たち? か? だが・・・一体誰・・・)」

瞬間、俺は驚いてしまう、滅多な事では驚かない俺だが、この時は驚いた、度肝を抜かれた

入ってきたのは二人の少女、それだけ聞けば別に驚きはしない、ここはIS学園、世界各地から優秀なIS乗りが集まってくる、だから女の転校生は珍しくはない、もし転校してきて大騒ぎするような奴だったらソイツはきつと男だろう

「矢車簪です、よろしくお願ひします」

「矢車本音だよ〜よろしくね〜」

ザワザワ

とクラスがざわめきだす

「(え?なにあの子? 矢車くんの妹?)」

「(でも彼女いるって言ってたし・・・もしかしてお嫁さん!?)」

「(バカ!この歳で結婚なんてできるわけないでしょ?)」

そんな話がボソボソと聞こえてくる、当然だ、あいつらは「矢車」を名乗っている、まあ、俺がそうさせたんだが・・・

一方クラスの話題の渦中にある俺は

ツウー

と涙が出てきた、涙は止まらず、それどころ増す一方だ

周りの女子が再びざわめきだす、当然だ、今まで鬼のような印象を持っていた男が泣いているのだから、動揺するのも納得する

相棒が心配そうに俺の顔を覗くが俺はそんな相棒を見ず、黒板の前に立つ二人の少女をまるで、無くしたのを見つけたときのような目で見ていた

自分でも何故こんなにも泣いているのかがわからない、しかしこの二人との再会は、俺にとって大きなことだ、もう二度と会えないと思っていた恋人とこうして再会できた

のだから

簪 & 本音 side

「緊張するね〜かんちゃん」

「え!? 本音でも緊張するときってあるの!？」

「もお〜ひどいよかんちゃん〜私だって人間なんだよ〜?」

そんなことを言いつつも彼女の顔はいつものように、ううん、いつも以上に穏やかに笑っていた

もうすぐ彼と会える、もう二度と会えないと思っていた彼と

きっかけは二ヶ月前・・・

あのとき私たち二人はまだ戦場のど真ん中にいて、いつ死んじやうかわからない、そんな状況だった、私の家は先祖代々から“裏の世界”では有名だ、対暗部用暗部の更家、少しややこしいので一言で纏めると、裏切り者を“殺す”組織だ

「ハア、ハア」

あのとき、私は本当に危なかった、敵がISを装備しているという情報が入っておらず、そのままの状態で戦っていたのだ、敵はIS、方やこちらはただの生身、蒼真だったら勝てるかもしれないけど、私には無理だ

そんなときだった、私が壁に追い詰められ、その銃口から鉛弾が火を吹く、直前、目の前のISが起動を停止した

「なんで!?!なんで動かないのよこのポンコツ!!」

「私の娘に」ポンコツ」なんて、酷いこと言うな、お前」

まるで、鬼を見ているようだった、ドスの効いた女性とは思えない声を出し、目の前のパイロットだけを切り裂く鎌は「死神」という印象を与えられた

その人は計ってか、私には血が着かないように殺すと、ISに手を突っ込み、何かを探すように手を探っていた

再び取り出された手を見ると、それが綺麗な青色の球体だということがわかった、女性性は球体を取り出した後、まるで我が子を抱き寄せるように優しく包みこんだ

「そうそう、今日はこつちに用があつたんだっ！」

先ほどの女性とまるで別人のように声が高くはねあがり、こちらへ近づいてくる

「やあやあこんにちは!!キミがそうくんの彼女の簪ちゃんだね!!私は東!東さんって呼んでね!!」

あまりにも元気な自己紹介でこつちが警戒心を解いてしまう、というか「東」って、あの篠ノ之東じゃ・・・?

「……こんにちは、篠ノ之さん私h「だから東さんって呼んでねっていったじゃん」

あつ……はい東さん」

「私は篠ノ之の性を捨てたんだよ？今の私は『影山』東、改めてよろしく、『矢車』簪ちゃん？」

女性……東はさつきよりもこやかな表情で私を見たそれよりも、気になることがあつた

「何で私が『矢車』簪だつて知ってるんですか？」

「ん？ああ、ひよつとしてそうくん言つてなかつたのかな……家族の話をしらないなんて……反抗期かな？まあ、いいや、まあ、端的に言うとな本人に聞いたからだよ」

「貴女は、彼の……お母さん……でいいんでしょうか？」

東さんはうんうんといった表情で頷いた

「今日はね!!キミにいや、キミたちに話があつて来たんだよ!!」

「話……ですか、じゃあ、少し待つて下さい、『キミたち』つて事は本音にも話があるんですよ？東さん？」

「正解だよ」

「それも、蒼真から？」

「うん、だつてそうくん、ひよつこり帰つてきたと思つたら、急に「彼女ができた」つて話して来るんだよ!あれは東さんでもビックリしたね、それで、簪ちゃんたちがそうく

んともう会えないかも、って悲しそうに話すから、東さんも悲しくなっちゃって」
「だから、引き取りに来たと?」

「引き取る」は少し違うかな?どつちかと言うと「救いだす」のほうが正しいんじゃないかな?」

私は少しギクリとしたが、多分蒼真が話してると思ったから説明はしなかった

「やつと通信繋がったよかんちゃん大丈夫?」

ふいにいつものふ抜けた声が聞こえてきた

その後、私たちは合流し、安全地帯へ移動し、東さんの説明を聞いた

「IS学園って知ってるでしょ?あそこに、そうくんといつくくんが入学することになったんだ」

「え!?!」

私たちの声が被ったがそんなことを気にしている場合ではなかった

「蒼真たちがIS学園に入るってどゆこと?」

「申し訳ないことに、私のミスでね・・・マスクドライダーシステムって知ってるでしょ?」

「仮面ライダー・・・」

「変身つてやるやつ〜」

私たちが回答を言うのと、東さんは少し笑った

「そうだよ、それ、それは私とそうくんで共同開発したものなんだけど、少しISのコアが使われててね・・・ISコアネットワークにそうくんという“男性”の適性者が登録されたの、それで、マスクドライダーシステムを使う二人とゴミの一人がIS学園に入学することになつちやつたんだ、まあ、入学することは私が進めたんだけどね」

この時私はどうすべきか悩んでいた、更織としての責務か、この支配からの解放かそんなとき、私に鶴の一声が舞い降りた

「それで、二人にはIS学園に入学してほしいんだよ」

「え・・・!?!」

また私たちは声が被ったが同じように気にする余裕はなかった

「どういうことですかあ〜?」

「どういふもなにも、そのままの意味だよ?二人にはそうくんを支えて欲しいんだ、これからちよつと厄介な感じになりそうだから、その時にそばにいて支えてあげて」

と、その後私たちは世界からは“死亡”扱いになっている、“更織”“簪”“布仏”“本音”としては、今の私たちは“矢車”もうあの家には縛られない、私たちは彼の、蒼真のそばにいる、何があつても絶対

三人称秋水 side

「矢車簪です、よろしくお願ひします」

「矢車本音だよ、よろしくね」

「ヤグルマ？イマヤグルマツテイツタ？」

秋水は目の前の女子二人を食い入るように見ていた、既に光の灯らない眼には矢車と名乗った二人の少女がまるで鏡写しのように写っている、何故彼女らが矢車と名乗っているのかが秋水には理解できなかった、自分を嘲笑うかのような眼差しで秋水を見ていた蒼真の実妹なのか、それ以外の何かなのか、など、今の彼には判断できなかった

ただ・・・その眼には・・・

「(アイツハ？ヤグルマノ、イモウト？ジャア、アイツを殺せば、アイツに仕返しができる・・・?)」

悪意に満ちた殺意がゆらゆらと灯っていた

今回、話全然進みませんでしたね w w

さて、正気じゃなくなってきた自称天才君、どうしてやろうかな？ w w

では皆さん、また次回（いつになるかわかりませんが）お会いしましょう
P S、感想や本文を読んでわからない部分などありましたら、感想欄で気軽に質問
してきて下さいね、ネタバレにならない程度に答えますので

光るなら

蒼真 side

あの二人が矢車として転校してきたHR、俺は体調が悪いと言って抜け出し、屋上で俺は東にコンタクトを取っていた、その際あの二人は俺のことをものすごい眼光で睨んできたが、俺は逃げるようにして屋上へ来た

「・・・東」

「そうだよー東さんだよーどうしたのそうくん？そうくんから掛けてくるなんて、珍しいね」

「御託は良いからホントの事だけを話せ、あの二人をここに転入させたのはお前だな？」

「そうだよ」

「・・・ありがとう」

「え？」

ブツ

俺はそう言うのと電話を強引に切った、そうしないと、俺の今の状態が解ってしまうからだ

ポツポツと俺の頬を伝う大粒の涙に、アイツが気づくから、あのまま会話を続けていたら、嗚咽が漏れてしまっただろう。

「泣きっぱいの、治さねえとな」

俺は心の中で、昔のクセを悔いていた

ガチャ

俺が空に向かって独り言を呟いていると、後ろの方から音がする、校舎は綺麗なＩＳ学園だが、以外とこんなところの扉はガタがきているので、普通より大きな音がなった俺が目涙を拭い、扉の方を見ると、二人がいた

「ああ・・・ああ・・・」

俺はその二人を見て、また涙を流してしまう、このふたりは、簪と本音は、あの時と同じ笑顔で迎えてくれた、あの時と同じ声で

「やっぱりそうまん屋上にいたよかんちゃん」

「そうだね本音、変わってないね蒼真は」

二人が俺の方を見て少し笑う、この安心感は久しぶりだ。

「ただいま、蒼真！」

二人が俺に向かってそう言う、そして俺はもう何年も二人に言っていないセリフを言う、ごくごく当たり前で、日常的な一言を

「おかえり」

そうして俺たちは、授業が終わるチャイムが鳴るまで泣いた、無様に、滑稽に、けどその涙は価値のあるものだった

世界はこんなにも残酷で、冷たくて、苦い、けどさ、温かみを求めてみてもいいよな……

一夏 side

「兄貴の奴……どこいったんだよ……」

俺は千冬に言われ（強引に）兄貴を探しに校内を回っていた

「ん……？」

俺が二階から三階への階段を上っていると、例の転校生の声が聞こえた。

「ねーかんちゃん、蒼真いるかなー？」

「たぶんいるよ、蒼真は昔から何か考え事するときとかは屋上に行つて、一人で考えるクセがあるから」

二人の話し声が止まると、さつき以上の足音が聞こえてくる、おそらくスキップでもしているんだろう。

「さっきの兄貴もそうだけど、あの二人って前兄貴が言つてた彼女なのかな．．．？しかも二人も．．．、まあ俺が言えた義理じゃないけど）」

俺は二人の後を追つて、屋上へ来た、すると俺は信じられない光景を目の当たりにする

泣いていたのだ、兄貴を含めさっきの子が、三人で抱き合つて、泣きじゃくつていた、別に兄貴が泣いているところが想像できないわけじゃない、でも兄貴が誰かと感情を共有している光景が珍しかったんだ。

「ここは、邪魔しない方がいいか、影山一夏はクールに去るぜ．．．）」

俺は心の中でどこかのおせつかいやきの男のようなセリフを吐きながら、屋上を後にした

その際、廊下でブツブツと何かを言っている秋水を見かけたが、特に気にはしなかった

時は飛んで、翌日、え？飛びすぎ？んなことあどうでもいいんだよ

「ん．．．朝か」

俺は暑い日差しのもと、目をさました昨日は久々に思いつきり泣いたからだろうか、直ぐに寝れた、あのあと空気も読まず織斑先生が入ってきて二人を連れて行った為、そ

の後二人が何処に行ったのかは知らない、だが恐らく教室に連行されたのだろう、俺はというと、そのまま寮に戻り、布団の中で悶えていた

「ん？」

俺はふと、両足に違和感を感じる、別に痛いとか、動かないとかではなく、何かこう：巻き付かれてる感じ

まさかと思い布団をひつpegす、するとー

「ん、蒼真、おはよう」

「ん？：そうまん起きるの早いよ」

二人がいた・・・もう一度言おう

フタリガイタ

「(え!?!何でコイツらここにいんの?それよりも何で俺の布団の中に?あれ、大丈夫だよな、俺、何もしてねえよな!?)」

頭の中がオーバーフロー状態になりつつある俺の脳に二人は更なる追い討ちをかけた

一言で言おう、裸だったのだ

アイエー!?!ナンデ!?!ハダカナンデ!?!

「(ちよつとまで!このままじゃ理性という概念が崩壊してヤバイことになる・・・!い

やもうヤバイことになってんのか!? ああー!」

ガチャ

扉の開く音がした、恐らく一夏だ、しかしこの状況を見られてはマズイ・・・、とりあえずコイツらを布団の中に押し込んで・・・

「冗貴? そろそろ朝練・・・を」

瞬間、一夏は固まってしまふ、それはそうだろう、自分の部屋に戻ったらルームメイトが全裸の女の子二人を布団の中に押し込んでいるのだ、見る人によつては強姦とも捉えるだろう

「お、お邪魔しましたあ・・・」

「待って相棒!! 話を!! 話を聞いてくれえ!!」

その朝、俺たちの部屋で俺が必死に弁明していたことが噂になっていた事はまた別のお話

毎度毎度あんまり進まないのに投稿が遅れてしまつて本当に申し訳ない!

テストがあテストがあるんですよ!

こんなクソ亀投稿の作品ですが何卒よろしくお願いいたします
(感想、高評価お願いします)

Love & Peace

どうも皆さんこんにちわ、マクレイドデス

最近、友達がここハーメルンにて小説を投稿したらしいのですが、なんと日間ランキ
ングに乗ったらしいのです（ー）オメデタイネ

友人がランキングに乗っておめでたい一方、僕は凄く劣等感を感じています（負けな
いぞ!!）

では本編どうぞ

p s . 少し遅れてすみませんでした

蒼真 side .

俺は朝の騒動について、一夏を説得し何とか時間内に食堂に足を運ぶ事が出来た
「兄貴、ああいうのはせめて俺の居ないときにしてくれよ?」

「だから、本音と簪が布団の中に居たんだって、俺はなにもしてない」

ていうか、扉にはロックがかかっているはずだし、どうやって入ったんだろ? まあいい
か

「ところで……」

ギュー

「何で二人は俺の腕にくっついてるんですかねえ？」

「寂しいから」

「そうまんいい匂いだから」

「まあ女に抱きつかれて嫌な男はあんまり居ないだろうし、二人とも彼女だから嬉しいんだが……」

ふと、二人の胸元に目が行ってしまふ、俺の腕に無意味に押し付けられている合計4つのソレは、思春期の高校生には脅威になる、だって二人ともちよいさいサイズなんだもん、大きすぎず小さすぎず、程よいサイズだ

「兄貴も大変だな……」

一夏はやれやれといった表情で俺たちを見つめていた、ていうか相棒、お前も同罪だからな？

「ところで兄貴、今日だぜ？」

「ん？何がだ？」

「クラス代表決定戦」

「ああ……」

俺は忌々しそうに顔を俯かせる、俺にとつては勝手に決められたこの試合はどうしようもなくダルくて仕方ないのだ

「オルコットが骨のあるやつだということに期待するでしょう、まあ無駄だろうけどな」
 「俺もそう思うことにするよ兄貴、じゃないとやってられない、今のモチベーションは兄貴と戦りあえるって事ぐらいかな？」

俺たちが流暢に話をしていると、オルコットが食券に列を抜かして話しかけてきた
 「さつきから聞いていればなんですの!!」

「何って、何がだ？」

「勝負に対してのやる気の無さ！挙げ句の果てにはわたくしを侮辱し、もう勝ったつもりでいる!!ふざけないでくださいまし!!」

あーあ、メツチャ怒ってやがる、メンドクセエ、まあいい遊んでやるか

「オルコット、お前、何か勘違いしてねえか？」

「はい？」

「今お前は“勝ったつもりでいる”と言ったな？」

「ええ、言いましたわよ？」

「ソコが勘違いだつたよ、この際だ良いこと教えてやる、”勝負は始まる前から決まってるんだよ”運なんてない、その日の勝負に対する気持ちや体の調子、もつと言え

ば普段どれだけトレーニングをしているか、どんなものを食べてどんな生活をおくっているのか、それら全ての要素が一度に影響してくるものソレが試合だ、わかるか？お前は“努力をしてない”んだよ」

どうだ？これだけ言えば怒ってくれるだろう

「聞き捨て・・・なりませんわ!!わたくしは代表候補生として毎日怠ることなく生活していますわ!!あなたはどうなんですか?!人に言えるだけの努力をしているんですの!?!」

「努力?ハハ・・・ハハハハハ!!!」

「何が可笑しいんですの!?!」

「いや?人はこうも勘違いを重ねられるものなんだと思つてな」

「え?」

俺はダルそうな顔を起こしてオルコットの顔を見る、今にも噴火しそうな、火山のような顔をしている女がそこにいた

「いいか?俺がしているのは努力じゃない、俺は必然的に、言わば当たり前にお前が“努力”と呼んでいるものをしてるんだよ、努力つて言うものはな、自分の為にするもんだ、勉強しかり、日々のトレーニングしかりだ、ソレを社会では努力と呼ぶ、じゃあ人の為にする努力”はどうだろうな?俺は一言で言えば“愛”だと思う、例えばだ、親父が家族の為に身を削って働く、ソレは努力と言うか?違うよな?」

「では貴方は、愛……つまり自分の為ではなく、他人の為に己を磨いていると言うのですか!？」

オルコットは信じられないと言った表情で俺を見ていたが俺には関係ない、ソレが俺の人生だからだ

「そうだ」

「たとえ、一万回人間に裏切られたとしても、ですか?」

「ああ、誰に裏切られても、今の俺には守るものがある、コイツらの為だったら、何度だって裏切られてやる、ソレが俺の人生だ」

「……」

オルコットは少し黙ると、俺は立て続けに言葉を放つ

「最後に良いこと教えてやる、お前がやることが努力と認められない理由だ」

「へえ?どんなことですか?」

「お前、自分で『努力してる』って言ったけど努力って言うのは人に言われて初めて成立するわけ、オルコット、お前は最初からアウトって訳だ、わかりやすく言ってやろうか?英雄は英雄になろうとした瞬間に失格って訳だ」

「(人生で言いたかったセリフ第5位を言うことができた!! やっぱり北岡さんは名言生産機だな! うん)」

俺は内心そんなことを考えていたが、ふと、オルコットのの方を見ると、彼女は少し俯いていた、まるで目の前の現実から目を背けるように

「……えませんわ」

「あ？」

「ありえませんわ!!」

オルコットはそう言つて食堂を飛び出して行つてしまつた

「はあく、さて、飯食うか」

簪と本音が俺の両頬をつついてくる、そして二人を見ると、プクーつと頬を膨らませていた、なにこの生き物、可愛い……あ、なんだ俺の彼女か……

そんな事を考えながら俺は簪と本音、そして一夏と朝飯を食つた、うん、塩つけたサンドイツチうめえ

三人称セシリア side

「はあ、はあ」

セシリアは何も考えずにただ廊下を走っていた、特に目的地があるわけでもなかったが、今は走つていたかつた

「(ああ、誰に裏切られても、今の俺には守るものがある、コイツらの為だったら、何度

だつて裏切られてやる」

不意に、さつきまで会話していた男一矢車蒼真の言葉と顔が浮かび上がる、だがセシリアはソレをかき消すように頭を振った、ただただ、辛かった、あの死んだ魚のような目で自分の努力を否定されたのが、セシリアは代表候補生になる前も後も、絶え間なく努力を続けていた、ソレを蒼真はハッキリNOと言ったのだ

「男が・・・はあ、そんなこと、本気で思つてるわけ・・・ありませんわ」

セシリアは幼い頃に両親を事故で失い、以来メイドとの二人暮らしだった、だが、記憶の中の男一父はとても尊敬できるような人間ではなかった、いつもペコペコと軽い頭を下げ、母親の顔を伺い、娘のセシリアには振り返りもしない、そこからだ、そこからセシリアの男嫌いは発生したのだ、ソレがISの登場による世界風潮の変化で拍車がかかつてしまった

「わたくし自信の正義を貫く為にも、今日の試合は必ず勝ちますわ」

一人孤独に呟いた言葉は、誰の耳に届くこともなく廊下の壁に反射してセシリアの耳に返つてくるだけであつた

蒼真 side

キングクリムゾンツツ!!

何か今時を飛ばすスタンドが発現した気がするが、気にしないでおう

さて、いよいよクラス代表戦が始まる・・朝はダルそうにしてたが、やはり戦う前の高揚感とは良いもので、普段のストレスをぶちまけられる

ちなみに俺は今アリーナのピットにいてそこでストレッチをしている

コツコツ

扉の方から足音が聞こえる多分簪と本音だろう

「蒼真、いる?」

「そうまんく応援に来たよ」

ほらな? ビンゴだ

「ああ、居るぞ」

「あくいたいた、頑張ってね」

「蒼真、頑張ってね!!」

俺は「ありがとう」とだけ言うと二人の頭を撫でた、うん、可愛い

「じゃあ、行つてきます」

「行つてらっしゃい!!」

二人の彼女からエールを貰い俺はアリーナの中央へ歩き出した

ポロポロのコートを着てピットから出る、まだ春だと言うのに日差しが痛い、だがそ

れ以上に驚いたのは観客の数だった、簡単に例えるならプロ野球とかの観客席の風景、一席も空いていないアリーナの観客席は人で埋め尽くされていた、中には立って見ている人もいて、どちらかと言うと高校野球の甲子園に近い印象があった

先程から観客席にしか目を向けてなかった為に、あまり前を見ていなかった

「遅かったですわね、矢車さん、このわたくしを待たせるのは中々度胸が座っていますのね、褒めて差し上げますわ、それと何故ISを纏っていないんですの？ああ、私に恐れをなして土下座をしに来たのですか？良いでしょうその軽い頭を地面へ擦り付けなさい、さあ、早く」

オルコットはまるでマシンガンのように俺に対して罵詈雑言を浴びせて来るが、俺には何の効果もない

「悪いな、俺の可愛い彼女二人に構っていたら、時間が惜しくなっちゃってな」

「ふん、口は達者ですわね、あんな平凡な女性二人より、わたくしのほうがよっぽど清楚で遅しく、美しいとは思いませんか？まあ、あんな平凡な女性二人で満足してるようでは、あなたも底が知れるというものですわね」

ブチッ

瞬間俺のなかで何かが“切れた”

「貴様あ．．．!!今あの二人を笑ったな．．．!!」

俺はドスの利いた声でそう言ったするとオルコットは「ヒッ」といつて一歩後ずさつた、もう殺気を隠す必要もない、俺はコイツを・・・

「徹底的に叩きのめす!!」

俺は銀色のベルトのバックルを開ける、するといつものように両面で色の違う俺たち地獄兄弟の相棒である変身アイテム「ホッパーゼクター」がピヨンピヨンと音を立てて近づいてくるそして俺はホッパーゼクターを左手で掴み、バックルに差し込む

「・・・変身」

[Henshin]

[Changge Kick Hopper]

いつもより遥かにドスの利いた声で俺はそう言う、そしてベルトから六角の模様が浮かび上がり、俺は仮面ライダーキックホッパーへと変身した

「お、踊りなさい!!わたくしと、ブルーティアーズの奏でる円舞曲へワルツで!!」

「悪いが交響曲へワルツは好きじゃねえ狂想曲へカプリッチョでもどうだ? まあいい」
俺は右手をそのまま上げ、手首をクイツと反転させ親指を地面へ向ける

「さあ、地獄へ墜ちな」

俺なりの戦いのスイッチ（決め台詞）を入れ、試合のブザーが鳴る、そして俺とオルコットの死合が始まった

「地獄なんて、御免こうむりますわ」

オルコットはそう言いながら自身のISの主武装でもあるビット装備、ブルーティアーズを飛ばしてくるだが俺はそれらを当たり前のように躲す

「この程度か・・・」

「ツツ!!?どこまでもバカにして!!」

激高したオルコットは続けざまにブルーティアーズで攻撃してくる、だが俺はそれを何度も何度も躲した

「(何故ツ!?当たらないんですの!?)」

「それが、俺とお前の経験の違いだからだ、さつきも言っただろう?」勝負は始まる前から決まってる”ってな、こっちはキレてんだ、容赦はしねえぞ?”

俺はオルコットの考えを見透かし、オルコットを動揺させるそしてバツクルのスイッチをなでる

「Clock up」

そんな電子音が鳴り響いた

「この手は少し卑怯な気がするが・・・まあいい」

時間がゆっくり流れている、ビットに向かい、ホッパーゼクターの足を逆方向へ倒す
「ライダージャンプ」

[Rider Jump]

少し声の低い電子音が鳴ると、俺は跳んだ

ライダージャンプの伸びが終わり、ホッパーゼクターの足を戻す

「ライダーキック」

[Rider Kick]

再び電子音が聞こえ、俺は自身の必殺技であるライダーキックを放つ、だがそれでは終わらず、左足のアンカージャッキを作動させ、別のブルーティアーズを落としていく

[Clock Over]

電子音が鳴り、時間が戻る、それと同時に俺がライダーキックを叩き込んだビットたちは、盛大な爆発をした

「え?!何で!?何が起こってるんですの!?!」

オルコットは目の前の“一瞬で自分の武装が全滅した”光景に驚きを隠せないでいた

「これで終わりだ・・・楽に死ねると思うなよ?」

「ヒッ」

オルコットはおびえていた、自分が男に負けたというのがショックだったのか、はたまた俺の殺気におびえたのかはわからないが・・・多分両方だろう

俺は、何度も何ども、オルコットを蹴り続ける、ふと観客席の方を見ると、目を伏せたり、自身の目を覆ったりしている奴等もいた

「もう・・・やめて・・・下さい」
ブー

とアリーナのブザーが鳴る、だが俺はまだ蹴り続ける、周りがざわざわしているが、関係ない

「矢車くん!!試合は終わりました!!終わりましたからあ!!」

「あ?」

教師陣が俺のことを止めに入る・・・ちよつとやり過ぎたか・・・俺は少し自己嫌悪に陥りながらも、ピットへ戻った

活動報告でも言いましたが、今回は豪華(?)二話連続投稿です

(こんな文字数書けたの初めてだあ)

戦わなければ、生き残れない

連続投稿じやあああ!!

(深夜のアホテンション)

本編どうぞおおおお!!

蒼真 side

「・・・」

俺はオルコット戦を終え、アリーナのピットへ戻っていた

「また・・・やっちゃまったな・・・」

一人孤独にそう言うどプルプルと震えている自分の手を見る、この光景を見るのは俺にとつては別段珍しくないだが・・・

「クソツ!!俺は・・・人を守るために・・・この力を手に入れたつてのに、何やってんだ俺はあ!?俺は・・・」
「アイツ」みたいな人間をこれ以上出さないために、このシステムを・・・作っただんじやねえのかよ!!なのに俺は・・・
「僕」は・・・」

俺は自分の拳をピットの壁に叩きつけた、少し壁がへこんでしまった、俺はそのまま

力が抜けたように壁にへたりこむ

「どうせ俺なんか・・・」

周期的に出てしまう自己嫌悪に陥ってしまった、部屋の端で膝を抱え誰にも気づかれないように座っていた

俺がそうこうしてる間に、第二試合が始まったのか、アリーナは歓声で包まれていた

一夏 side

「やっぱり兄貴はすげえよ・・・!」

俺はまるでプロ野球を見ている野球好きの男の子のように兄貴の試合に見入っていた
た

「俺は・・・やっぱり兄貴と戦いたい!兄貴を越えたい・・・あれ?兄貴・・・?」

瞬間、俺に背筋が凍りつくような悪寒が襲う、あの兄貴からとんでもない殺気が放たれたのだ、こんな殺気は初めて、と言うわけでは無かった、一度だけ、一度だけあったのだ、この殺気を感じた事が

「まさか・・・あの時と同じ!?マズイ!?」

今俺は酷い焦りに襲われている、早く兄貴を止めないと

「(死人が出る・・・!)」

俺は観客席を飛び出し、廊下でケータイを起動させる、相手は俺の彼女の一人であり、天災の異名を持つ女、影山東だ

「ハイハイ！東さんだよ！どうしたのいっくん？」

「理由はわかんねえけど兄貴がキレてんだ！頼む東、織斑先生の所に通話を繋げてくれ！！」

東は「うんわかった、10秒待ってて」と言うとかたかたと言がし始めた

そこから程なくして、また東の声が聞こえた

「いっくん！！繋いだよ！早く！！」

「ありがとう！！今度東の好きな料理たんまり作ってやるからな」

「え！？本当に！？やったー！！」

東がそう言うのとブツつと音がして、声の主が変わる

「織斑千冬だ、誰だ？」

「影山一夏だ、織斑先生、頼みがある」

「・・・何だ？」

「兄貴を止めてくれ、今の兄貴は普通じゃない、教師陣にISを纏わしてでもいい！！早く兄貴を止めないと、死人が出る！！」

しばらくの沈黙が流れる、どうやら渋っているようだ

「千冬姉!!」

「ツツ!!」

電話の向こうで少し、織斑先生が動揺したのがわかった

そして

「わかった、だが矢車を止めるのは、オルコットのSEがゼロになったときだ、それまで我慢しろ」

「ありがとうございます」

俺はそう言って電話を切った

あの女を、織斑千冬を“千冬姉”と呼んだのは、何年ぶりだっただろうか

その後、アリーナでは半ば暴走する矢車を教師陣が止めに入り、第一試合は終了した
「全く、一段落ってところか」

ピンポンパンポン

「影山くん影山くん、第二試合がありますのでピットへ移動してください」

さて次は俺の番だ、相手は兄貴に続いてオルコット、正直勝てる気しかなかったが、まあ適当にやるとしよう

そう考えつつ、俺はピットへ向かった

〜一夏移動中〜

「さて、俺の出番だ」

俺はそう言ってピットの中からアリーナを見渡す、観客席から見ても思ったが、すごい人だ

「影山一夏、出ます」

俺はそう言って、兄貴と同じように変身しない状態でアリーナへ出る、歓声が響き渡り、戦いへの高揚感を与えてくれる、この感じは大好きだ

「さて、奴さんはまだか・・・」

俺はオルコットを待っている間に、ホツパーゼクターを拭いていた、すると反対側のピットから、オルコットが勢いよく飛び出てきた

「さあ、し、勝負ですわ!!」

オルコット自身は隠しているつもりなんだろうが、体は震えて腰は引けており、そのせいか声まで少し震えている、よっぽど兄貴との試合が堪えたんだろう

「オルコット、お前が兄貴に何を言っただ怒らせたのかは知らない、だから俺は、手加減抜きでお前を潰しに行く、お前には悪いと思ってる、だが俺は謝らない、その恐怖心を克服して俺といひ試合が出来ると思ってるからだ」

「わたくしにはその様な恐怖心などありませんわ!!必ずや貴方を倒して見せますわ!!」

オルコットは自身の恐怖心をかき消すようにそう威勢を張ったが、どうにも効果は薄

いらしい

「じゃあ行くぜ?・・・変身」

「Henshin」

「Change Panch Hopper」

「踊りなさい!!ブルーティアーズとわたくしの奏でるワルツで!!」

「その台詞毎回言ってるのか? 恥ずかしいねえ!!」

と、俺の挑発に乗ったようにオルコットはブルーティアーズを飛ばしてくるが、兄貴と同じようにそれを避け、それぞれのブルーティアーズに拳を叩き込んでいく

「(ん? オルコットのやつ、ブルーティアーズを動かしてる時、動いてないな、同時に操作が出来ないタイプか、なら、それを使わせて貰おう)」

俺は兄貴ほどの実力はない、だから「見る」、相手を見て動きを観察し、弱点を見つける

「そこだ!!」

俺はオルコットの隙を見つけるとイグニッションブースト並みの脚力を利用して一気に懐まで迫る、そうして一発オルコットの腹に拳を叩き込む、絶対防御が発動したのか、オルコットはそんなに痛がる素振りを見せなかったが、その体は後方へ吹き飛んで行った

「こっちへ、来い!!」

現在進行形で吹き飛んでいるオルコットへ再び近づきオルコットの足を掴むと、一気に腕を引き、丁度顔面の位置に拳を叩き込んだ、地面にはクレーターができ、オルコットは気絶していた

「しよ、勝者、影山一夏!!」

オオオオオオオオオオ!!!

熱い歓声が鳴り響いた、俺の勝利を祝福するように

俺は右手を大空へ掲げ、ガッツポーズをした、これにて、俺のIS学園に来てからの単独白星が掲げられた

秋水 side (蒼真 vs オルコット戦直後)

「やっと、ようやく、このときが来た、ボクの愚弟とその兄を殺れる日が・・・」

ボクは誰もいない屋上で一人、孤独に呟いた、少し前のボクならこんな一人で寂しいことはしなかったが、昔と今のボクはちがう

そんなことを考えていると、アリーナから悲鳴にも似た声が聞こえた、ボクは直ぐにアリーナの監視システムにアクセスし、状況を見る

「へえ、彼が取り乱すなんて、珍しい事もあるものだね・・・あーあ、キレてるね完全に、ほほう、やっぱり彼女たちか、じゃあやっぱりボクの目に狂いは無かったみたいだね、あ

の二人を殺れば：：君を壊せる、フッフ、アツハハツハ!!!問題は、影山のほうだね：：彼は多分、矢車を壊せば連鎖的に壊れていくかな？フッフ」

ボクは一人で笑っていた、狂ったように、だが以前までの虚ろな目ではなく、その目には確かに、「殺意」という一つの思いが乗っていた

「壊してあげるよ、ボクを壊してくれたお礼にね、矢車蒼真、影山一夏、君たちはどんな風に・・・泣いて、叫んで、吐き出して、コワレルノカナ？」

狂気じみたボクのその手には、紫のサソリの足のような模様の入った剣の様なもの握られていた

さあ久々に登場しました秋水くん、明らかにヤバイことになってますねクオレハ

そして最後に登場した剣、察しのいい人なら気づいてるんじゃないでしょうか？フッフでは皆さん、次の投稿が何時になるかはわかりませんが、その時まで see you

その目の闇は

こんにちは、こんばんわ、おはようございます、マクレイドデス

なんと、★9の評価と★8の評価を付けてくださった方が居ました!! いやもう本当にありがとうございます!! 先の見えない不出来な作品ですが、何卒よろしくお願いいたします!!

(izusさん、TRIGUNさん、スカーレット@エボルト憑依中さんカプトロンガーさん、本当にありがとうございます)

先に謝っておきますが、今回は胸糞成分多めです、こういうのが苦手な人は目をそらすずに見て頂けると、書いたこちらとしても、好ましいです

秋水side

ボクの愚弟、一夏は昔から全てにおいてボクや千冬姉さんより劣っていた、勉強も運動も、千冬姉さんがやっていて半ば強制的にやらされていた剣道も、全てボクが上をいつていた、そんな愚弟の居場所と言えば家事炊事や料理位だった、ボクが家に帰るといつも虚ろな目で

「おかえり」

と言った、そのままボクは何時もソファーに横になり、小一時間は寝ていた、しばらくすると一夏がボクを起こし

「風呂に入れ」

と催促する、上から目線の一夏に怒り、いつもボクは怒鳴っていた

程なくして千冬姉さんが疲れた様子で帰宅し、ボクが寝ていたソファーに横になり、一夏に対して、夕食はまだかと催促していた

「もう少しかかるから、風呂に入ってきて」

と一夏が言う、姉さんは必ず

「私の言うことが聞けないのか、早く飯を持ってこい」

と一夏をぶった、姉さんからのビンタは痛い筈なのに、何も反応しない、そんな一夏がいつも不気味だった、ボクが一夏をイジメ始めたのはこの頃からだ

あるときは通学路だった、いつも先に学校に行っている一夏に少し遅らせて家を出て、後ろから一夏の背中を蹴った、双子とは言え、剣道を辞めた一夏とは違いボクの脚力は一夏より強く、前のめりに倒れた、そんな様子を見てボクを含め途中の道で合流したボクの仲間は盛大に笑った、嘲笑った、無様だと、お前が姉さんの弟であっていいはずがないと、盛大に罵った

ふと、起き上がった一夏の目を見ると、あの目だった、この世に希望や光を知らないような、どす黒い渦のような目

ボクは怖かった、ずっとあの目で見つめられると、自分の中で大切な何か壊れるような気がした、だから、イジメ続けた

ボクは、人気者だった、当然だ、成績優秀で運動もできる、文武両道を絵に描いたような人間、そんなボクが、テストを受ければ全教科全問正解の100点で、運動部の助っ人に入れば、その試合や大会は必ず優勝または勝利する

廊下を歩けば、女子男子問わず、ボクの話題で持ちきりだ、いつも下足箱はラブレターで溢れていたし、放課後、それを好ましくないと判断した者たちは、ボクを呼び出し、リベンジしようとしたが、返り討ちにした、普通なら教師陣から事情を聞かれるなり注意を受けるなりするはずだが、ボクにはそんなことは無縁だった

印象に残っていたのは、箒を助けた時だった、世間が白騎士事件で物騒になっていたが、箒は篠ノ之の妹だ、それを好ましくないと思った親は妹の箒を叩いた、そのイジメを根元から根絶やしにし、終わらせた、すると箒はボクに付いて来るようになった

そんな日々が長く続いた、そして千冬姉さんがモンゴロツソにて最強への王手を掛けた、その報せを聞き、ボクは一夏と共に（ボクが強制的に連れていき）海外へ飛んだ

そして、一夏が誘拐された、始めにボクは

「よし、やった」

と心の中でガッツポーズをとった、もうあの目に飲み込まれる事はない、あの暗闇のぞきこむ事はないと、そう思った、家事は最初こそ戸惑ったが、何てことはない、直ぐに慣れて、何でもこなせるようになった

だが、そんな日々に、亀裂が入った、生きていたのだ、愚弟である一夏が、ピンピンしていた、だが雰囲気違った、あの目は相変わらずだったが、奴の周りにたちこめていた視界を霞めるような黒いオーラは無く、代わりに何かほんわかした、陽気のよなものがあつた

奴が教室で、ボクの視界で笑うたび、黒いモヤのようなものがまるで鎖のようにボクの心を締め付けた

決定的にソレを認識したのは、やはりあの時だ、奴に影山一夏に絶対的な差をつけられ、完敗してしまった、あの時、それまでの亀裂が一気に広がり、鎖のように巻き付いたモヤは、遂にボクの心を覆った

そして、ボクは壊れた、それまでの栄光が嘘のように、ボロボロに、無惨に、崩れ落ちた

あの頃の記憶は曖昧だった、ただ覚えていたのは・・・

「矢車簪です、よろしくお願ひします」

「矢車本音だよくよろしくね〜」

ここだけだ、ここだけハッキリ思い出せる、黒いモヤがかかっていた視界はクリアになり、ノイズがうるさかった聴覚は次第にその機能を取り戻していった

まだ核心は持てなかった、だから矢車蒼真に聞きに行こうとした、だが先客がいた、あの二人だった

その会話を聞いた、その嗚咽を聞いた、流れる涙の音を聞いた

その時のボクの顔は歪みきっていただろう、いつもニコニコしていた口は三日月状に歪み、いつもの爽やかな顔つきではなかった

この時核心した、矢車簪と矢車本音は、いわゆる矢車蒼真の大切な人だ、だからこそ、ソコが弱点になる

「やっと、キミを壊せる・・・」

まずは力が欲しかった、奴等と渡り合える力が、近々ボクに専用機が配備されるらしいが、それでは足りない、そこで、奴等のデータを取った、何度も何度も何度も、この日まで寝ずにデータを取った、するとある日の深夜、ボクの携帯に着信が一件、非通知だった、怪しみつつもボクは携帯を手に取った、深夜の部屋で携帯の光が眩しかったが、もう目が半開きになっていたボクにはあまり関係無かった

「こんばんは、織斑秋水くん、研究しているシステムの調子はどうかな？」

まず聞こえたのは女の声だった、妖艶な艶やかで透き通った声だった、その声だけで相手が大人の女性なんだということをボクは理解した

「誰だ？ボクは忙しいんだ」

「あら、驚かないのね、肝が座ってるのかしら？それともただのやせ我慢？」

「用件が無いのなら切るぞ」

「・・・余裕が無いのね、そんなに元弟に負けたのが悔しいの？子供ねえ、さて、からかうのは終わりにして、用件を言うわ、貴方、私たちの仲間にならない？貴方がそうしてくれたら、貴方が欲している力を全てあげる、無論貴方がしようとしている事の手伝いもするわ」

その言葉にボクは戸惑ってしまった、何故、見ず知らずの女がボクのしようとしている事や開発しているシステムを知っているのか、まるでわからなかった

だが、アイツらを壊すのなら、このシステムを完成させなければならぬ、だから・・・「わかった、アンタたちの仲間になろう、でアンタたちの名前は？」

「そう、ありがとう、歓迎するわ、私たちの名前は——

「亡国企業」

こうして、ボクは力を手に入れた、そして今から行くのは、紛れもない殺し合いの場だ、そしてボクは右手に持った、愛剣——”サソードゼクター”を握りしめ、アリーナへ向かった

今回は秋水くん主体でお送りいたしました、さあ、悪魔と契約してしまった秋水くん、次回一夏との戦いで・・・!?

では次に会えるその時まで See You

(感想やアドバイスが自分の活力となりますので、感想、高評価、よろしくお願いします)

About Me

三人称蒼真side

どこかもわからない廊下の壁に蒼真はへたり込んでいた、一夏の試合が始まったというのに彼は見に行こうというそぶりすら見せずに、ずっと壁に何かをブツブツと話している、その光景は一種の洗脳のように、もし誰かがこの光景を見たとすれば、一瞬彼とは想像ができないだろう、その目は黒く深く灰のような目だった

蒼真は学園内で少しクールというよりダークな雰囲気だが、今の彼の背中からは、そんな印象はうかがえない、ただ一つ感じるものがあつたとすれば、それは『後悔』だが、なぜそんなことを思っているのかは本人である蒼真以外はわからなかった、いや恐らく蒼真自身もわからない、彼はなぜ己が信念を曲げてまで救いたかつたモノ、それを壊しそうになってしまったのか、彼自身にもわからなかった、彼はそのままたれていた壁にへたりこんだ

簪side

「(蒼真・・・どこ行つたんだろう?)」

私はいつまでたつても戻らない蒼真を心配していた

「本音、私、蒼真探してくるね」

「わかったよ、私も心配してたからね、せつかくのイチーの晴れ舞台なんだから、そうまんにも見てもらわないと」

本音に場所を取っておいてもらって私は蒼真を探した、最初はピットの中を探した、でもいかなかった、整備員さんに聞いたらふらついてどこかに行ったらしい、心配だ

「蒼真ー? どー? いたら返事してー?」

私は普段出さないような大きめの声を出して最愛の人の名前を呼んだ、でも返事は帰ってこなくて、廊下の壁に声が反射して帰ってくるだけだった、それが凄く不安で寂しかった

「… じゃない… だろう」

不意に彼の声が聞こえた、何千何万回と繰り返して聞いてきた、大好きな声が、でも彼の声はすごく弱弱しくて今にも消えてしまいそうだった

私は彼の声がある場所へ向かった、全速力で、彼よりは遅いけど普通の女の子よりは早いくらいの私のスピードでも、すぐに追いついた

整備員さんが言っていた通り、彼はとても弱弱しかった、今にも崩れてしまいそうだった、壁にへたりこんでいて何かをブツブツと言っていた、

「蒼真!!」

私が彼の名前を呼ぶと彼は少し止まって、ゾンビのようにヌツと振り返った、すると驚いた、彼の目が死人と間違えるほどに死んでいた、普段でもあまり彼の目は生き生きとしてはいないが、それ以上に今の彼の目は死んでいた

「ああ、簪か・・・そうか、もうそんな時間か、相棒の晴れ舞台、見てやらねえとな」
彼は私を認識するなり、普段の彼に戻って行つた、その状態に少しほつとした、そのまま私たちは観客席に向かつた

でも、目の暗闇はまだ無くなっていなかつた事にこの時の私は気付かなかつた

一夏 side

俺は今アリーナのピットで座禅を組んでる、え？なんでそんなことしてるのかつて？
簡単な話、相手がアイツだからだ、だから心を乱さないように集中してる、心の乱れは技の乱れ、技の乱れは体の乱れ、兄貴が一番始めに教えてくれたことだ

織斑秋水、俺の元兄にして俺の人生を狂わせた奴の一人、前に一度戦つたけど、弱かつた、弱すぎた、だから今度は期待なんてしない

『影山くん、織斑君、入場してください』

放送が入ると俺はピットからアリーナへ歩く、この声は多分山田先生だ、ホントに働かずめなんだな・・・頭が上がらない、少し歩くと反対側から黒い影が見えている、おそらく秋水だ

互いがアリーナの中央へ集まり、俺たちは向き合った、だが俺は秋水の服装に驚愕した、なんと表せばいいだろう？西洋の貴族？みたいな、感じの服装だった、黒いハットと黒いスーツを身に纏い、手には杖のようなものを持っている、余裕なのか秋水はその杖をくるくると回していた

「やあ影山くん、久しぶりだね、いつ振りかな？一週間？それとも二週間かな？ボクはこの日を待ちわびてたよ、キミはどうか知らないけどね」

「よお自称天才のクソ野郎、久々だなアンタといつ振りかななんて数えたくもないが、強いて言うなら二週間ぶりだ、ところでそのチャップリンみたいなふざけた格好は何だ？アンタの趣味じゃないだろう」

秋水は前に会った時のような狂気は感じずどこかおちやらけた雰囲気だった、だがそれが俺にとつてはものすごく不気味だった

「ハハ、実の兄に向かつてそれは酷いなあ、まあいいや」

「俺にとつちやアンタなんて兄でもなんでもない、クソ以下の生物だ」

俺は秋水の言葉なんか意に介さずにホッパーゼクターを手に取った

だが秋水はいつの間にか“それ”を手にしていた

「紫の、刀？」

「ああ、これかい？なあに気にすることないさ、そうだな、ボクの専用機つてところだね」

秋水は俺が指摘するとまるで欲しかった玩具を手に入れた小学生の様にその刀を見せつけた

その刀はよく見るとサソリの足の様な装飾がしてあった

そして—————

「さあ、お前の晴れ舞台だ、サソードゼクター」

秋水はそう言うとは後方から飛んできた機械のサソリを掴み、刀にマウントさせた

〈H E N S H I N〉

〈C h a n g e S c o r p i o n〉

「さて、始めようか」

紫の戦士が、俺の前に鎮座した

「ツツ!?!」

その姿に俺は一瞬硬直してしまう、いまの秋水には以前のような雰囲気は無かった、代わりに“強者”という二文字の空気が俺の脊髄から脳へダイレクトに警告してきた

“コイツはヤバイ”と語彙力のない警戒文だが、他の言葉など考えれるハズもない、目の前にいるのは確かに圧倒的な強者、兄貴には並ばずとも、それを脅かすくらいの気迫だった

「どうした? 変身しないのか?」

「っ！変身」

〈H E N S H I N〉

〈Change Punch Hopper〉

秋水と俺は互いに動かなかつた、否、動けなかつた、極度の緊張で筋肉が強張るのを感じる、観客からすれば一分にも満たない時間が1時間、2時間くらいに感じた、アリーナが緊張と静寂で包まれる、すると、観客が何か大きな物でも落とされたのか、大きな音が鳴つた

俺たちはそれを合図に攻撃を仕掛けていく

俺は小手調べに秋水に右ストレートを一発食らわせる、綺麗に腹に入ったにも関わらず秋水は平然としていた、試してやる、とでも言わんばかりの余裕だつた、それに気づき少し感情的になつた俺は、腹に更にラツシュを入れた、某漫画ならオラオラオラオラ、と聞こえてきそうなくらいの威力だつた、その筈なのに、秋水はまだ余裕だつた、ラストにアゴにアツパーを入れた、秋水は少しよろめいたが、それでもまだピンピンしていた

「もう終わりかい？残念だな・・・今度はこっちからいくよ」

そう言う秋水は先ほどのサソリの機械の尻尾の部分に手をかけた、すると恐らく外部装甲がプシューと空気をたてる

「キャストオフ」

秋水はそう言うのと、尻尾を押し込んだ、すると装甲だったものはとんでもないスピードで俺の体を襲う、多分あばら骨の二本は逝ったかな

「さて、次はこちらから行かせてもらおうよ」

痛みでうずくまっている俺の頭部を持ち上げ、秋水は俺の胴体を切りつけていく、剣道の影もない所謂メツタ切りださっきの装甲で少なからず大きいダメージを負ってしまった俺からすれば、痛いなんてモノじゃなかった、叫び声を上げないのがやつとないくらいだった、気がすんだのか秋水は俺の胴体を蹴った、すると俺はアリーナの壁に激突してしまう、意識が朦朧とし、立ち上がれなかった

「ライダースラッシュ」

〈R i d e r S l a s h〉

そんな声が聞こえた、気づけば秋水は尻尾の部分をもう一度押し込んでいた

心なしか、刀から何か毒々しいものが垂れている気がする、そして俺は見た、見てしまった、あの構えを幼い頃に植え付けられたトラウマを、ああ、やっぱ俺はコイツに負けてしまうんだ、今も昔も

多分切りつけられているのだろう、だがそれを認識する前に、俺の意識は途絶えた

「(ごめん兄貴)」

「しよ、勝者、織斑秋水!!」

オオオオオオオ!!!

意識が途絶えると同時にそんな歓声が俺の脳を揺らした

投稿遅れてしまつて、本ツツツ当にすみません!!!

リアルでバイトの面接があつたり、テスト期間だったり（ry

があつたのでなかなか書けませんでした、本当に申し訳ありません

しかも待たせておいてこの文字数・・・頭が上がらない

また、次の投稿まで期間が空いてしまうと思いますが、次に会うその時まで see

you

p, s 秋水の服装は地獄三兄弟時代の神代くんです

兄として

蒼真 side

コツ コツ コツ コツ

床からはそんな軽快な音が二人分聞こえてくる、先ほどアリーナから大歓声が聞こえてきたので長い時間この音ばかり聞こえていた訳ではないが、何故だろう、さつきからこの音ばかりが耳に響く、それが何だか不快で少し顔をしかめていた

「ねえ、蒼真」

「何だ簪？」

不意に下ばかり向いていた俺の顔を覗き込むようにして簪が顔を出す、その仕草がとても愛らしくて心の中で可愛いと何度も呟いてしまいそうだった、可愛い

「一夏、勝ったかな？」

「相棒は勝ってるよ、あんな奴に勝てないほどヤワな鍛え方はしてないからな」

こう言うのをフラグ発言と言うのだろうか、だが俺の心の中では一夏は絶対に負けなといった確信があった、アイツには才能があった、俺にはない目標に向かってただひたすらに走り続ける才能が

だが、そんな俺の一種の願いはピットに入った瞬間に変わった

「影山くん!!起きてください!!影山くん!!」

「・・・山田くんは救護班を呼んできてくれ・・・この場は私が」

一瞬、俺の視界は真っ白になる、だが担架で運ばれる一夏を見て、色が戻っていった、俺はそれが一夏から出ている事に気づくのに時間がかかった

「織斑千冬!!相棒は!?何でああなった!?!」

俺は、織斑千冬に迫った、俺の怒号がピットに響く、IS学園に来てから殺気を飛ばす事はあっても腹の底から怒鳴った事は無かった

そんな俺に驚いたのか、織斑千冬は表情を少し暗くした

「秋水が・・・」

「あ??」

おどおどとした口調で織斑千冬は続けた、それは子供が親に言い訳をするときととても似ていた

「秋水がやったんだ」

「アイツが・・・?」

俺は心底驚いた、やったのはオルコット辺りかと予想していたのだが、秋水?アイツ

が？少し前、相棒と戦った時は手も足も出なかったハズなのに、何故？

「あんたは？」

「え？」

織斑千冬は弱々しげに呟いた、まるで自分は関係ないとても言い張る様に

「アンタはどうしてたのかって聞いてんだよ!!織斑千冬!!アンタは教師として、相棒の姉」として!!何かしたのか!?!ええ!!」

「私は、山田くんが異常に気づいて、それから————」

そこからはよく覚えていない、聞き取れなかった、というより、聞きたくなかった、この女は今何て言った？「山田くんが異常に気づいて」？つまりこいつは、試合が始まってからずっと秋水しか見てなかったのか？

様々な思いが俺の心中を掻き乱す、動揺、焦り、憤り、失望、そして、後悔

あの時俺が徘徊せずにそのままピットに残っていたなら、相棒を助けられたかもしれない
ない

そんな様々な思いが俺の脳と心を乱す

「とにかく、次の試合はお前と秋水だ」

今この女の発言にまた俺は驚かされる、試合を続ける？重傷者が出ているのに？

教師という役職以前に、今の織斑千冬にはまともな判断ができてはいなかった

「もういい、わかった」

俺は冷たくそう言うのと、ピットから出た

秋水 side

「アハハハハ!! やった!! やったぞー!」

一夏との試合を終え、僕はピットの中で不敵に笑う、僕はただ、嬉しかった、奴が、一夏がもういなくなった、それだけで腹の底から笑いが込み上げ僕の心に張り付いた黒い靄も徐々に晴れていく、その快感の感覚が堪らなく、形容しがたいほどだった

「急所を斬った、サソードの毒も体内に注入した、これでまだ生きているというなら君は“人間じゃない”よ影山君・・・フッフ」

少しの不安をにじませている僕の耳に放送のアナウンスが響いた

「ええ・・・クラス代表戦は続行となります、ので織斑君と矢車くんは至急準備を始めてください、なお第四試合は10分後からスタートになります、その他の生徒の皆さんは、トイレ休憩や水分補給などをしていてください」

放送の声はまたも山田先生、まったく、姉は何をしているのかと不安になる、大方、一夏の看病だろう

「一夏、また一夏、姉さんは、やっぱり僕を見てくれないんだね・・・」

ひとり呟いた孤独な声は、誰の耳に届くでもなく、空に消えて行つた

三人称 side e

「では、第四試合、始め!!」

オオオオオオオオオオオオオ

盛大な歓声とともに第四試合、織斑秋水 vs 矢車蒼真の試合が始まった

「・・・変身」

「HENSHIN」

「Change Kick Hopper」

先に変身したのは蒼真だった、ホッパーゼクターをバツクルに差し込む、六角形の模様が現れ、蒼真はキックホッパーへと変身する

「ツツ!?!」

変身を終え、秋水のISの展開を待っていた蒼真だったが、次の瞬間、彼の視線は秋水の右手に集中する

「何で・・・何でテメエがソレ」を持ってんだよ!!」

蒼真が見たのは銀の刀身がギリリと光る紫の刀、サソードゼクターであった

「何故って、簡単さ、君たちを倒すためだよ? 矢車蒼真くん、僕は力を入れた、何者

にも負けない、全てを極める力を」

「そのシステムが、どれだけ危険なモノなのかわかってんのか?! ええ!」

「危険? そんなもの百も承知さ僕は君たちに敗れて、地獄を見た、耐え難い程の恥と苦痛を味わった、するとね、嘔いてきたんだよ・・・亡霊が、僕はその亡霊たちに魂を売った、自分の魂と引き換えに、力を手に入れた、この力で、君たちを“殺す”」

純粹な殺意、蒼真が感じたのはただその感情一つだった、だが、蒼真にはどうしても引つ掛かるものがあつた

「何故コイツがサソードを? いったい誰が? 何のために? まあ、今はいい・・・」

「さあ、始めようか、変身」

[HENSHIN]

[Change Scorpion]

「ツツ!」

秋水の変身で、蒼真は二度目の驚きを体験した、本来サソードはキックホッパー、パUNCHホッパーと同じく中間フォームを挟まずに変身する、だが・・・目の前に鎮座するサソードには、重々しい鎧が付けられていた

「どうしたんだい? さつきから、気持ちが悪れているんじゃないかなあ? フフフ・・・」

「(マズイぞ・・・)」

蒼真は今内心スゴく焦っている、サソードの登場、本来存在しないはずのフォーム、何よりソレの装着者が秋水だと言うこと、これらの要素が蒼真の頭のなかを掻き乱していた

「さあ、かかってきなよ、愚弟とは違って、僕を楽しませてよ」

「あゝ？今テメエ何て言った？」

「聞こえなかつたかなあ？君の”愚かしい弟とは違って楽しませてよ”って言ったんだよ」

秋水はわざと挑発するように蒼真に言った

「貴様・・・!!相棒を!!弟を笑つたなあ!!」

「そう、それだよ!!僕が求めているのは!!本気の君と殺し会って、君を下す、そして僕が頂点に君臨する!!さあ!!もつと怒れ!!矢車蒼真!!僕を憎め!!」

「言われなくても殺してやるよ!!」

蒼真が走り、やつと戦い・・・いや”殺し会い”火蓋が切つて落とされた、蒼真は秋水の方へ走るが一夏の時と同じく秋水は動かない、全てを受け止めるつもりで鎮座している

蒼真は走つた勢いに乗せてドロップキックを秋水の腹に食らわせるが、秋水は微動だにせず、その程度か、と言わんばかりに手を広げている、蒼真はドロップキックの反

動で一回転しサマーソルトキックを秋水の顎に食らわせる、その後も蒼真の渾身の一撃は、徐々に秋水の体を壊していく、極めつけは空中で一回転しそのままの勢いで首筋に食らわせる、秋水は吹っ飛んだが、直ぐにまるでゾンビの様に起き上がった、サソードの体に張り巡らされているチューブの様なモノは衝撃からか亀裂が入り、毒々しい液体が、垂れていた

「ハア、ハア、やつぱり一夏とは大違いだよ、アハハハ!!君は僕を楽しませてくれる、最ツ高だ!!今度は・・・僕の番だね、キャストオフ」

〔Cast off〕

サソードが纏っていた鎧が弾け飛んだ、幸い鉄塊が蒼真に当たることは無かったが、鉄塊が当たった地面はクレーターの様なものができていた、キャストオフした瞬間秋水は蒼真の視界から消えた、蒼真は直ぐにクロックアップだと判断したが、今の蒼真にはクロックアップは使えなかった、何故ならセシリア・オルコットとの試合で既に使ってしまったからだ、クロックアップシステムは一定時間の高速移動と引き換えに大量にエネルギーを消費するため、一日に一回程が限界なのだ、その為、蒼真はクロックアップが使えない

自分が切り刻まれていく感覚、腕が、足が、顔が、次々に傷を負っていき、遂には膝を着いてしまった

[Clock Over]

そんな電子音が聞こえると、膝を着いた蒼真の前に秋水は立っていた、そして、その刃で蒼真を仕留めようとしたその時……

「制限解除コード、声帯入力、入力コード——The darkness of hell is here (地獄の闇はここにあり)」

蒼真がそう呟くと、キックホッパーの複眼が赤く光る、蒼真の周りには黒い霧が立ちこめ、視界を悪化させる、

「貴様、さつき、僕は地獄を見た」と言ったな」

何処からともなく、蒼真の声がする、恐らくは目の前の霧の中に居るのだろうが、まるでそんな気がしない、まるで空気の一つ一つが蒼真の意思で動いているような、そんな感じだった

「今から貴様に本当の地獄を見せてやる」

霧の中から現れたのは、キックホッパーの形をした、真っ黒な戦士だった

投稿遅れてホントツトウにすいませんでしたああああ!!!

いやあね、色々あったんですよ（言い訳）テストとかバイトとかいろいろね、後はモ

ンハンやったり(殴
さて、ソレでは皆さん、次回もお楽しみに
s e e
y o u

浄化の黒

秋水 side

「お前に本当の地獄を見せてやる」

矢車はそう言うのと僕の目の前から“消えた”これがどれだけ異常なことかわかるだろうか、人間を超えたクロックアップシステムを搭載したこのマスクドライダーシステムは、クロックアップしている相手でもある程度の残像は見える、なのに“何も見えぬ”“それどころか奴の気配も、殺気も微塵と感しない”

「何故!?なんで何も感じない!?生き物である以上は殺気までは隠せたとしても、生気まで感じないことはないはずなのになぜ!?」

次の瞬間秋水は自分の足に何か違和感を感じた——まるで、膝から下が無いような

「あ”あ”あ”あ”あ”ああああああああああ!!!」

僕の違和感どうり、僕の足は、膝から下が“無くなっていた”

まるで引きちぎられたかのような痕の残る足は、もう足としての機能を果たさず、僕はその場で崩れ落ちた

次の瞬間、奴が僕の目の前に現れた、先ほどと同じ黒い霧を纏った漆黒の戦士が、奴は僕の目の前に歩いてくると、何かを言った、痛み of せいで何を言ったのかはわからない、僕はあまりの痛みで頭がおかしくなつて、まるで救いを求めるかのように右腕を前にだし、奴にすがりつくような恰好をしていた、すると奴は、僕の腕を

“蹴り飛ばした”

これは決して比喩表現などではない、実際に僕の右腕が宙を舞つた、千切れて宙を舞つたその腕は後方の観客席まで吹っ飛んだ、どこからか悲鳴が聞こえてくる

おそらく僕の腕を見てしまったんだろう、僕は痛み of せいなのか、僕は意識を手放した

蒼真 side

「ハア・・・ハア・・・終わった」

俺は変身を解き、右腕と左足がなくなつた秋水を見下ろしている、完全に気絶して静かな秋水とは裏腹にアリーナは阿鼻叫喚の嵐だ

遠くから来るのは・・・教師たちか、随分と遅かつたな

力が入らない、なんだか・・・視界が、揺らいで――

そして俺は“一滴も血が出ていない”秋水を見ながら倒れた

二時間後――

一夏 side

「あ？知らない天井だ・・・ってそんなこと言ってる場合じゃない！兄貴は？？」
「いっ！こいるぞっ！」

俺は声のした方を反射的に向いた、カーテンで仕切られてる奥から声がした

俺はそのカーテンを開けようとすると、最初からいたのかわからないが、黒服の男二人に止められた、かなりガタイが良いから、恐らく外国人だ

「兄貴？？どうなってるんだ？？こいつらは？？」

「相棒、騒ぐな」

不意にカーテンが開けられる、兄貴の姿を見て俺は絶句してしまふ

「よお、相棒、気分はどうだ？俺は最悪だ」

まるで猛獣を囲う鉄柵のように兄貴は拘束されていた

俺が兄貴の姿に絶句していると、部屋の扉が開いた

開けた主は千冬だった、顔を蒼白にしてまるで生気がそのまま抜かれたかのような彼女はとても正気とは思えない目をしていた

「織斑！これはどういうことだ？？なんで兄貴が拘束されてるんだよ！」

「相棒、騒ぐなって言っただろう、向かいの怪我人に響く」

兄貴はそう言って顎で向かいを示すと、そこには秋水がいた、だが生命維持装置をつ

けられ、栄養補給用のチューブが取り付けられていた、だが俺が驚いたのはそこじゃなかった、無いのだ秋水の右腕と左足が

「兄貴！ どういうことだよ！ なんて秋水はあんなザマになつてるんだよ！ まさか兄貴が？」

「ああそうだ、俺がやった」

その言葉を聞いた瞬間、俺は身震いを禁じ得なかった、兄貴が？ 何で？ そんな疑問が俺の頭を混乱させる

「そのことで事情聴取だ、矢車、来い」

「待て！ 待てよ！」

俺の叫びも虚しく、兄貴は黒服の男達に連れて行かれた

「ごめんな」

兄貴がそう呟いたのに俺は気づくことができなかった

???
side

「——彼の様子はどう？」

「ああ、——か、器はもうボロボロだな、なにせ右腕と左足を持っていかれてる、しかも本人の精神状態もボロ雑巾だ、でもそっちの方が都合が良いんだろ？」

「ええ、” 太陽” を手に入れるには普通の器では無理よ、一度地獄を見てる人間ども無い限り、ね？」

「相変わらず性格が良いな——は」

「でも彼が壊れてくれたおかげで、” 太陽” が手に入る、わざわざ篠ノ之博士の情報管理システムにハッキングをかけてサソードのデータをコピーした甲斐があったわ」

「でも器もスゲーよなあ本来ライダーシステムには無いマスクドフォームを開発しちゃうなんてよ、さすが天才を自称するだけはあるよなあ」

「何はともあれ、これで” 太陽” が手に入る、これで私たちの計画は次の段階へ進めるわ」